

平成18・19年度
道徳教育実践推進アクションプラン

「道徳教育実践事例集」



平成20(2008)年3月
兵庫県道徳教育推進協議会
兵庫県教育委員会

平成18・19年度道徳教育実践推進アクションプラン

「道徳教育実践事例集」

発行 兵庫県教育委員会
連絡先 〒650-8567
神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL (078) 341-7711 (代表)

19教T1-016A4

この冊子は再生紙を使用しています。

あ い さ つ

情報化、国際化、少子高齢化、家庭や地域の教育力の低下など、教育を取り巻く社会状況が大きく変化する中で、児童生徒の規範意識の低下や倫理観が十分に身に付いていないなど様々な課題が指摘されています。このような状況にあって、道徳教育は次代を担う子どもたちに「生きる力」の核となる豊かな人間性を育み、人間としてよりよく生きていく上で欠くことのできない道徳性を養うものとして、益々その充実が求められています。

このことから、県教育委員会においても道徳教育を重点課題と位置づけ、子どもたちが興味を持って道徳的価値の自覚を深めるとともに、日常生活の中で生かせる道徳的実践力を着実に身に付けるための指導方法の工夫・改善や、家庭や地域社会との緊密な連携を図る取組、さらには、「心の教育」の充実のため本県が体系的に実施してきた自然学校や「トライやる・ウィーク」などの体験活動と道徳教育との有機的な関連を図る取組などを進めてきました。

この取組の具体として、平成18・19年度の道徳教育実践推進アクションプランにおいては、県下にモデル地域(校)を指定し、児童生徒の興味・関心を高め魅力ある道徳の時間を展開するための地域教材の開発・活用や、「いきいき学校応援団」の導入、さらには、学校・家庭・地域関係者が相互に意見交換する道徳教育フォーラムの開催など、総合的に道徳教育の充実を図る実践研究を行ってきました。

この度、これら道徳教育実践推進アクションプランの取組を「道徳教育推進協議会」の協力のもと、本冊子にまとめました。この冊子が各学校における道徳教育の推進に役立てられ、子どもたちに高い道徳性や豊かな人間性が生まれ、兵庫のこころ豊かな人づくりに資することを心から願っています。

最後になりましたが、本冊子を発行するに当たり、ご尽力いただきました「道徳教育推進協議会」の渡邊満委員長をはじめ、委員の皆様や各モデル地域(校)の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成20年3月

兵庫県教育長

吉 本 知 之

道徳教育実践事例集の作成にあたって

本事業は平成16・17年度の事業において作成された『「地域教材の開発」指導資料』を踏まえ、その発展としてさらに新たな地域教材の開発を行うとともに道徳の時間の授業としてそれらを実践化するための取組を行ったものです。この平成18・19年度道徳教育実践推進アクションプランに参画したメンバーの一人として、本事業の作業部会において一貫して各メンバーが共有してきた本事例集作成の基本的な考え方について述べておきたいと思います。

この事業の全体的意義については、次のように言うことができます。まず、題材を地域に求めていることです。これは、基本的には子どもたちは家庭や地域で育つということに関わります。その基盤が確かなものでなければ、子どもたちの健全な成長が困難になり、また、学校も十分な教育機能を果たすことができないことは周知のとおりです。次に、子どもたちの諸課題に即した心に響く道徳教育、特に道徳の時間の授業には、道徳教育や道徳授業についての一定の深い理解と知識が必要です。この課題に効果的にアプローチする方法の一つは、先生方自身が教材とそれを実践する指導案を開発することです。それによって学校における道徳教育と道徳の時間における道徳教育の意味や関連、さらには各々のねらいや方法も明らかになってきます。その意味で、本事業はきわめて実践的な意義を持つ取組だと言えます。

教材の作成にあたっては、前回の成果を踏まえ、学年や学校段階など児童生徒の発達段階への配慮、内容項目の明確化、特定の地域だけでなく他の地域でも使えるものにする、行事などであっても必ず人物を介在させ同時に人物の選定を慎重に行うこと、さらにこれを使って行う授業を念頭に置くことなどに留意しました。最後の2点は特に重要です。人物によるその行事の解釈を通して考えることが可能になり、また、学習活動において子どもたち自身が考えを深める鍵になるものが教材の中に組み込まれていることが必要だからです。

次に授業、つまり指導案の開発に関しては、次の諸点に配慮しました。展開過程は子どもたちの考えの深まりを生み出すために型にはまらず柔軟に考えること、発問にはきめ細かな注意を払い効果的なものを工夫すること、各教科や領域での学習や多様な体験活動との関連を考慮すること、さらには保護者や地域の方々の「いきいき学校応援団」としての参画等を踏まえて展開過程を構成することなど、前回の成果を踏まえ、教材開発とともに子どもたちの内面的な思考の質の部分に焦点を当てた授業開発を課題にしたとも言えます。

以上のような諸点を踏まえて本事例集が完成しました。道徳の時間を子どもたちの「豊かな心」の育成の時間とするために、各学校では「心に響く道徳教育」への多様な取組をすでに行っているところですが、本資料集をご活用いただき、さらに独自の取組をこれに加えていただければ幸いです。最後に、多くの時間をこの事業に割いていただいた作業部会の先生方の努力と熱意に、また貴重なご意見を下さった委員の先生方、そして県教育委員会の関係者の皆様に改めて敬意を表したいと思います。

平成20年3月

兵庫県道徳教育推進協議会

委員長 渡 邊 満

目 次

第Ⅰ章 地域教材を開発・活用した授業事例 …… 1

1 <小学校低学年> 「がんばれ！スライホックス」 「学校のたから」	三木市立緑が丘東小学校 …… 2 篠山市立大山小学校 …… 7
2 <小学校中学年> 「地蔵盆」 「西光寺野に水を引く」	尼崎市立大庄小学校 …… 11 福崎町立田原小学校 …… 16
3 <小学校高学年> 「植村直己さんの外国での暮らし」 「淡路島に酪農を～三原酪農の父 田中萬米～」	豊岡市立府中小学校 …… 21 南あわじ市立榎列小学校 …… 26
4 <中学校> 「のり養殖に賭ける」 「為せばなる 漁業一筋 山田岸松物語」 「心だけが残った日」 「播磨の伝統技法『うっとり彫り』を守る～祭り屋台の鋳金具職～」	明石市立大久保北中学校 …… 32 神戸市立垂水東中学校 …… 37 宝塚市立中山五月台中学校 …… 42 太子町立太子西中学校 …… 47

第Ⅱ章 道徳の時間への「いきいき学校応援団」の導入事例 …… 53

1 篠山市立大山小学校 …… 54
2 南あわじ市立榎列小学校 …… 57

第Ⅲ章 道徳教育フォーラムの実施事例 …… 61

1 三木市立緑が丘東小学校 …… 62
2 篠山市立丹南中学校 …… 65

(表紙写真提供／尼崎市立大庄小学校)

第 I 章

地域教材を開発・活用した授業事例

1 <小学校低学年>	
「がんばれ！スライホックス」	三木市立緑が丘東小学校 …… 2
「学校のたから」	篠山市立大山小学校 …… 7
2 <小学校中学年>	
「地藏盆」	尼崎市立大庄小学校 …… 11
「西光寺野に水を引く」	福崎町立田原小学校 …… 16
3 <小学校高学年>	
「植村直己さんの外国での暮らし」	豊岡市立府中小学校 …… 21
「淡路島に酪農を～三原酪農の父 田中萬米～」	南あわじ市立榎列小学校 …… 26
4 <中学校>	
「のり養殖に賭ける」	明石市立大久保北中学校 …… 32
「為せばなる 漁業一筋 山田岸松物語」	神戸市立垂水東中学校 …… 37
「心だけが残った日」	宝塚市立中山五月台中学校 …… 42
「播磨の伝統技法『うっとり彫り』を守る～祭り屋台の鋳金具職～」	太子町立太子西中学校 …… 47

＜低学年教材＞

「がんばれ！スライホックス」

- ① 三木ホースランドには、たくさんの馬がいます。子どもたちは馬に乗ったり遊んだりして楽しくふれあうことができます。

その中で、スライホックスという馬は子どもたちに特に人気がありました。スライホックスはおとなしくて、人を背中にのせるのが上手なのです。それに、スライホックスはとてもくいしんぼうで、にんじんを一度に10本も食べてしまいます。りんごだと何と20個も一度に食べてしまいます。音楽をきくのも好きなのです。でも、りんごより、音楽よりもっと大好きなものがあるのです。それは、飼育係のさとこさんです。スライホックスはさとこさんを見ると顔をすりよせては目をパチパチさせて、えさをせがむのです。さとこさんは、そんなスライホックスがかわいくてなりませんでした。

- ② ところが、ある日のこと、とつぜんスライホックスがあばれだしたのです。スライホックスの様子がいつもとちがうので、ホースランドの人たちみんなが集まってきました。

「これはもしかすると、おなかの病気かもしれない。」

「早く手当てしないと死んでしまう。」

「そうだ 早く落ち着かせよう。」

しかし、スライホックスの体はとても大きいのです。力も強く、飼育係の人たちがおさえて静かにさせようとしても、スライホックスはますます苦しんで暴れています。その時です。

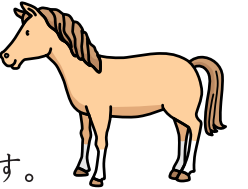
「あっ！ あぶない！」

大きな声が聞こえました。なんと、おなかをさすってやろうと近寄って行ったさとこさんがスライホックスにけられました。

それでもさとこさんは夜も昼もスライホックスの看病をしました。水を飲ませたり、おなかの中につまったうんちを出すために夜中でもスライホックスを歩かせたりするなど、一生懸命に世話をしました。

- ③ 体の大きい馬は病気になると、力がなくなって座ろうとするのです。しかし馬は

一度座ってしまうと、もう立てなくなって死んでしまいます。だから、何が何でもスライホックスを立たせておかなければなりません。さとこさんは、目に涙をためてスライホックスと一緒に歩き回り続けました。何日も何日もです。でもスライホックスは、だんだん弱っていきました。そして、とうとう座り込んでしまいました。座り込んだスライホックスは悲しそうな目でさとこさんを見つめていました。このままではスライホックスは死んでしまいます。



- ④ そこで、さとこさんは考えました。

そうです。スライホックスの大好きな曲をかけることにしたのです。

さとこさんはスライホックスのお気に入りの曲を流し続けました。

一週間たったある日、いつものようにさとこさんがスライホックスの体をふいてやっていると、スライホックスが急に頭を持ち上げました。そして足をばたつかせ始めました。

「みんな来て！」

さとこさんはあわててみんなに知らせました。駆けつけてきたみんなは、スライホックスの体を一生懸命ささえて「1, 2, 3」と、声をかけました。すると、スライホックスは自分で立ち上がり、ゆっくりと水を飲み始めたのです。

みんなは「やったで一、スライホックス」

とおおよろこびました。その後には、大好きなりんごもほおばりました。

それから何日かたってホースランドの中を歩くスライホックスの姿が見られるようになりました。

※1年生で授業をする際は、画像で補いながらこの資料を読み聞かせる。



第1学年

<学習指導案>

1 主題名 生き物を大切に 3-(1)動植物愛護

2 資料名 「がんばれ！スライホックス」

3 本時のねらい

身近な生き物に親しみ、その命を大切にしようとする気持ちを育てる。

4 主題設定の理由と教材開発

○ 三木市には馬とのふれあいを体験できるホースランドパークがある。子どもたちの多くは休日に家族と出かけて馬に乗る経験をしている。また1学期にはクラスでザリガニを飼って世話をしたり、オタマジャクシやカタツムリ、クワガタなどと触れ合ったりして生き物と親しんできた。時には、ザリガニの餌を何日もやらなかったため、共食いになり死なせてしまったことがあった。そして、死んでしまってもそのまま気づかずに放置したこともあった。家庭でも犬やねこなどのペットと楽しく過ごしている子が多い。しかし、散歩や餌をやるなどの世話は家族任せというのが大半である。このことは、それらの生き物をいつでも代替りのきくペットとしてかわいがっているにすぎず、かけがえのない生命ある存在として感じ取ることができていないと考える。

○ 生命を大切にすることとは、人間を含め、すべての動植物の生命を大切にすることである。生命を大切にすることを育てることは、人間尊重の精神の育成における基盤となる。自分の命、他者の命、すべての命の有限性を知り、生命を大切にしようとする心情を育てていく必要がある。

本授業で用いる資料は、三木ホースランドで実際にあった話をもとにした自作資料である。スライホックスという馬が腹痛を起こし、死と直面する。そして、そのスライホックスを可愛がっていた飼育係のさとこさんが懸命に世話をしてスライホックスを守る話である。子どもたちは強い絆で結ばれているさとこさんとスライホックスの気持ちを理解しやすく、「助けて」というさとこさんの気持ちに共感できると考える。まさに、この時期の子どもたちに生き物の生命を大切にしないといけないという気持ちを持たせるのに適している。

○ 指導に当たっては、何よりも感動を大切にしたい。そのためには状況把握を明確にさせる。挿絵を提示しながらお話作りの手法を用いて場面毎に進める。まず、導入部分でスライホックスとさとこさんの親密な関係を押さえ、その後には事件の状況を捉えさせる。そして、馬は「立つ」ということが「生きる力」であることを知らせ、病気になっても座らないで必死に頑張る姿を捉えさせる。また、役割表現を用いて一生懸命になって支えるさとこさんの思いに共感させる。その際、さとこさんの立場で自由に話させることで多様な意見を引き出す。それらを板書で整理、確認した上で、再度スライホックスに励ましの言葉をかけさせる。その時に、座っている姿から立ち姿へと挿絵に変化をもたせることでその場にいるような感動を呼び起こさせたい。さらに、「いきいき学校応援団」として、さとこさんに実際にスライホックスの話をしてもらうことにより、生命が助かった時の感動や喜びを味わわせる。これらのことを通して、命の有限性や大切さに気づかせ、生命あるものに優しく接する子どもに育てたい。

5 資料の特性を生かす手だて

- ・パワーポイントを使い、話によってホースランドの写真等を見せていく。
- ・スライホックスが座り込む写真を提示した時に、さとこさんになって役割演技を用いて、多くの児童の意見や気持ちを出させる。
- ・スライホックスとさとこさんの顔の絵を板書で提示し、簡潔に気持ちや言葉などを整理して書く。その際、板書の言葉と場面の様子を重ねて捉えさせるために、電子黒板より、黒板に貼れるプロジェクター用スクリーンを使用する。
- ・スライホックスの頑張りやさとこさんのやさしさに触れた後、さとこさん本人に「いきいき学校応援団」としてスライホックスの話をしていただく。

- ・スライホックスの気持ちになって、さとこさんへの手紙を書き、やさしさや頑張りに共感できたか、評価する。

6 展開

学 習 活 動	指導上の留意点
<p>1 本時の学習課題をもつ。</p> <p>生き物の世話をしたことがありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼っていた犬が死んでしまった。 ・猫が病気になったけど元気になった。 <p>2 スライホックスのお話を聞き、生きようと頑張るスライホックスについて話し合う。</p> <p>スライホックスの好きなものは何でしょう。</p> <p>りんご にんじん 音楽 さとこさん</p> <p>スライホックスはどうなったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・苦しくてあばれている。 ・大好きなさとこさんを蹴るほど苦しい。 ・「助けて」とさとこさんに言っている。 <p>3 スライホックスの世話をするさとこさんの気持ちについて話し合う。</p> <p>座ってしまったスライホックスにさとこさんはどうするでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・励ましの言葉をかける。 「がんばって！スライホックス」 「おねがい 立って！」 「立たないと死んでしまうよ」 ・好きなりんごをやる。 ・音楽を聞かせる。 ・そばについていてあげる。 ・獣医さんと呼ぶ。 ・立ち上がらせるために応援を頼む <p>4 元気になったスライホックスになって、さとこさんへ手紙を書く。</p> <p>スライホックスになってさとこさんに手紙を書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助けてくれてありがとう。 ・夜も寝ないで世話をしてくれてありがとう。 ・さとこさんはやさしいね。 ・大好きだよ。 	<p>○生き物を育てた経験を話し、生き物を育てる時の心について考えることを知らせる。</p> <p>○スライホックスの好きなものを確認し、さとこさんとスライホックスが硬い絆で結ばれていることを押さえる。</p> <p>○スライホックスとさとこさんの状況の変化を明確に捉えさせるために場面の絵を分けて提示する。</p> <p>○苦しんでいるスライホックスの姿をより印象付けるために、さとこさんの転倒を押さえる。</p> <p>○さとこさんの思いに気づかせるために役割演技を用いる。また、できるだけ多様な意見が出るよう、どの子にも発言させたい。</p> <p>○発言内容を板書で整理し、スライホックスのことを必死に思うさとこさんの思いに気づかせる。</p> <p>○さとこさんになって言葉がけをさせ、スライホックスの変化の絵を提示することで感動を呼び起こさせる。</p> <p>○ゲストのさとこさんの話を聞き、生き物の世話をする苦勞を知る。</p>

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

- ・授業を行うまでは、1年生児童に、さとこさんとスライホックスの両者になりきらせることが難しいかもしれないと思われたが、児童はさとこさんになりきってスライホックスを応援したり、スライホックスになりきってさとこさんへの気持ちを表現することができた。
- ・人と馬の間にも強い心の絆があることを知ることができた。

児童の記述（スライホックスからさとこさんへの手紙）例



- ・さとこさんのおかげでたてたんだね。おねがい、さとこさん、ホースランドの人にぼくがありがとうって言っていたっていいね。たすかったよ。またいっぱいおんがくをきかせてね。
- ・さとこさん、たおれてしにそうなとき、大すきなおんがくをきかせてくれてありがとう。げんきになったからのせてあげるね。
- ・いままでありがとう。だいじょうぶだった？おもくなかった？すごうれしかったよ。ほんとにうれしかった。ずっといっしょにいいよ。

これらの成果が認められるに至った背景として、次の点が挙げられる。

- ① 普通なら死んでしまうスライホックスを助けるために、児童がさとこさんの気持ちをどう受け止めるか、その時の言葉や思いを役割演技で発表させたこと。
- ② 主発問の後で、スライホックスに向かって「がんばれ！」とみんなで声をかけたり、スライホックスが立ち上がろうとした際に「1、2、3！」とかけ声をかける、という動作をみんなでやったこと。
- ③ 実際にさとこさんの話を聞いたこと。

2 今後の課題

- ・人と馬との絆を知るに至った要因の一つとして、さとこさん本人のお話を聞いたことが挙げられる。「いきいき学校応援団」としてさとこさんに話しをしていただけたら、1年生でも上記の成果はあげられる。
- ・病に倒れた馬が立ち上がる、という場面のイメージを1年生に持たせるのは難しかった。それを補うビデオ等が入手できれば、それを助けるいい手立てになる。



<低学年教材>

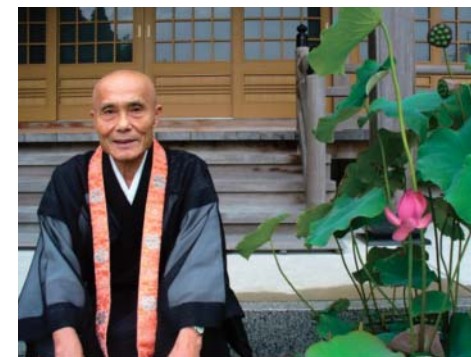
学校のたから

ある日じゅん子さんたち二年生は、高倉にある高蔵寺というお寺へたんけんに出かけました。

中には、りっぱな本堂があり、古いたて物や大きなかねがありました。ふと本堂のよこを見ると大きな切り株があったので、そこにすわり休むことにしました。

お茶をのみ、少しの間休んでいると、高蔵寺のおしょうさんがわたしたちのところに歩いてきました。

あいさつをすると、おしょうさんは、



「君たちがすわっているその切り株は、大山小学校のたからの一部なんだよ。」と話してくれました。

「えっ。」おどろいて立ち上がると、わらいながら切り株のひみつを教えてくださいました。

「大山小学校のげんかんに大きくてりっぱな柱があるでしょう。あのはしらはね、今君たちがすわっているここに生えていたんだよ。

それはそれはりっぱな木でね。四百年も生きてじまんの杉の木だったんです。でもね、根もとに大きなあながあいてしまっただけで、さんねんだけ切りたおさなければならぬかなしんでいたんですよ。そこへ、新しい大山小学校をたてるので、どうしてもこの木を学校の柱として生かしたい、しぜんを大切に地域のこの大山小学校にのこしたいという地域の人からの話があったんだよ。

わたしはその思いに心をうたれてね、よろこんで学校の柱として使ってもらうことにしたのですよ。

あの柱にはね、この大山小学校を大切にしてほしい。そして、みんながなかよく元気にすごしてほしい。そんなわたしや、地域の人のねがいがこめられているのです。だから、あの柱は学校のたからであり、君たち大山小学校みなさんのたからなのです。たくさんの人のねがいのかたまりでもあるんですよ。」

話を聞き終わると、じゅん子さんはすごうれしい気持ちになりいそいで学校に帰りました。

学校に帰るとすぐにげんかんにある柱の前まで行きました。

じゅん子さんは何も言わず、じっと柱をながめ、そっとさりながら思ったことがありました。



第2学年

<学習指導案>

1 主題名 わたしたちの学校 4-(3) 愛校心

2 資料名 「学校のたから」

3 本時のねらい

地域の方々の願いや思いに気づき、自分たちが生活している学校に誇りを持つとともに大切にしていこうとする心情を育てる。

4 主題設定の理由と教材開発

- 大山小学校の玄関に大きく立派な柱がある。これは、校区の高倉地区にある高蔵寺というお寺の境内にあった樹齢400年の杉の木である。大山小学校が新しく建てかえられる時（平成11年3月5日竣工）、学校で生活する児童のためにと大山振興会をはじめ、地域の方々の願いで、柱として使われることになった。柱に使われた杉の木の大きな切り株は、今もなお高蔵寺の境内に残っている。
- 本資料「学校のたから」は、この柱を題材とした資料である。一人の女の子が高蔵寺の住職から柱に大山の木が使われることになった経緯を聞き、柱に対する思い、そして学校に対する思いが少しずつ変わっていく様子を描いた自作資料である。児童にとっても、入学した時から当たり前のように玄関にあるこの柱は、毎日、目にするものであり、柱の前を通る度に叩いたり、触ったり、登ったりする、とても身近なものである。生活科で学習したことと結び付けていくことで、自慢できる柱のある大山小学校に対し、愛着や誇りを持つことのできる資料であると考えられる。
- 指導にあたっては、授業の導入で切り株の模型を提示し、生活科の「大山探検隊」の活動の中で見つけた切り株が、大山小学校の宝のヒントになることを伝えることで、学習の見通しを持たせるとともに身近なこととして意欲を高めさせる。展開では、大山小学校に立派な柱が立てられたのには地域の人の願いがあることを知り、どのような願いがあったのかを十分に話し合わせ、じゅん子さんが最後に柱をさわりながらどんなことを思ったのか気持ちを考えていくようにする。地域の人の願いを深く話し合うことで、柱を大切にしていこうとする心情を高めるとともに、自慢できる柱のある大山小学校を大切にしようとする気持ちや一緒に生活する友だちを大切にしようとする気持ちも高めていきたい。終末には、じゅん子さんの気持ちを踏まえ、大山小学校と同じ平成11年度生まれの本学級の児童であるが故に、自慢できる柱のあるこの大山小学校を大切にしていこうとする気持ちを高めていきたい。

5 資料の特性を生かす手だて

- ・導入時、切り株の模型を登場させる際、黒い幕をかぶせて登場させる。この中身が、学校のたからのヒントになることを伝え、思い思いに中身は何かを発表させることで、和やかな雰囲気を作るとともに学習意欲を高めさせる。
- ・学校のたからである柱と、生活科の「大山探検隊」で見つけた切り株とを結びつけることで、より身近な教材としてとらえられるようにする。
- ・資料の中に登場する住職は、「大山探検隊」の中で出会った高蔵寺の住職であり、言葉の部分を実際にテープに録音したものを流すことで、学習をより身近なものとしてとらえられるようにする。
- ・提示する写真は、全て子どもたちが「大山探検隊」に出かけ、自分たちで撮ったものを使用する。
- ・文章を音読するだけでなく、「大切にするとはどうすることなのか」など問いながら、児童の言葉で発表させることで、一つ一つの言葉のもつ意味を考えさせる。
- ・終末には、切り株の模型から「わたしたちと大山小学校は友だちなんだ」という言葉を出し、大山小学校と2年生は平成11年生まれと同級生であるという事実を伝え、学校のたからだけでなく、2年生にとってのたからでもあることを押さえる。

6 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 実物大の切り株の模型を見て思いを出し合う。</p> <p>この切り株をみて何か思うことはありませんか。</p>	<p>○切り株の模型を提示し、関心を持たせる。</p>
<p>2 資料「学校のたから」を読む。</p> <p>どうして、げんかんにあるはしらが、宝物なのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立派で丈夫だから。 ・大山といえば木だから。 ・地域の人や和尚さんの願いがあったから。 	<p>○高蔵寺の住職の写真を提示しながら、範読する。</p> <p>○和尚さんの話の部分は、実際に高蔵寺の住職の声をテープに録音したものを流すことにより、意欲を持たせる。</p>
<p>3 地域の人々の願いを考える。</p> <p>大山の人は、できあがった大山小学校のはしらを見て、どんな気持ちになったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はしらを大切にしてほしいな。 ・大山小学校を大切にしてほしいな。 ・みんななかよく、元気にすごしてほしいな。 	<p>○個々に想像させ、学校に対する気持ちのあらわれをとらえさせる。</p> <p>○大切にするという価値を広げさせる。</p> <p>○学校の柱の写真を掲示する。</p>
<p>じゅんこさんは柱をさわりながらどんなことを思ったのでしょうか。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・今まであんまり見ていなかったけど、さわってみると温かいな。 ・いろんな人のねがいがこめられているんだな。うれしいな。 ・こんなにっぱなはしらがある大山小学校ってすごいな。 ・大山の人たちのねがいをわすれずに、がんばっていくよ。 	<p>○ワークシートを用意し、自分におきかえて考えをまとめさせ、いろいろな人の願いを感じ取りながら学校を大切にしていこうとする気持ちを高める。</p>
<p>4 福井住職から2年生へのメッセージビデオを見る。</p>	<p>○お世話になった住職から、この大山小学校に対する思いや願いを込めたメッセージを見ることにより、学校を大切にしていこうとする心情を高めさせる。</p>
<p>5 学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大山小学校の新校舎と2年生は同級生である 	<p>○地域の人々の願いを受け、これからも大山小学校を大切にしていこうということを伝える。</p>

＜授業実践を終えて＞

1 取組の成果

- ・授業を展開していく中で、児童が驚いたり感動したりする場面がたくさんあり、児童にとって身近な教材を使用することの効果を実感することができた。また、児童自らが生活科の中で調べてきたことの発展的な内容であったことも生き生きと授業に取り組むことのできた要因の一つであると考えている。
- ・授業中に具体的な資料を使用することの有効性を実感することができた。例えば、導入での切り株の模型の登場、展開でのビデオレター、終末での切り株の模型からのメッセージなどで授業展開に変化をもたらすことで、低学年でも最後まで授業に集中し、ねらいに迫ることができた。
- ・地域教材を作成することは大変なことではあるが、その取材の過程で教師も様々な地域の人々との交流があり、地域とのつながりを深めることができた。また、読み物資料を作成することで、道徳の授業における効果的な展開の方法などについて、改めて学ぶことができた。



- ・大山小学校に400年も生きた高ぞう寺の切りかぶがあることがわかって、学校のたからものである切りかぶを大切にしていきたいと思ったよ。
- ・大山小学校の校しゃには、ちいきの人のねがいがたくさん、こめられていることがわかったよ。だから、これから校しゃを大事にして、そうじもがんばろうと思ったよ。
- ・ぼくと大山小学校の校しゃが同きゅう生とわかって、なんだかうれしくなったよ。いつまでもきれいな校しゃにしておきたいな。



2 今後の課題

- ・自作資料を作成するにあたり、学年の発達段階に応じた内容や言葉などを考慮し、よりねらいへと迫ることのできる資料を作成することの難しさを実感した。
- ・ねらいに迫る有効な発問や板書の工夫、効果的な具体物の提示の仕方などについて事前に十分、吟味することが大切である。



＜中学年教材＞

じ ぞう ほん
地蔵盆

夏休みもあとのこり一週間になりました。今日は、楽しみにしているお地蔵さまのお祭りがあります。お父さんも子どものころに、お地蔵さまのお祭りには行っていたことを話してくれました。

ぼくは、ようち園に行く前からいつも、たかひろ君といっしょに行っています。

今日もやくそくをしています。

「ただし君、お祭りに行こう。」

「うん、いっしょに行こう。」

ぼくたちは、お地蔵さまへとかけだしました。

「今年もおかしもらえる

かな？」

と、たかひろ君がきいてきたので、

「だいじょうぶだよ。いっぱいあるから。ぼくも楽しみにしてるんだ。」

お地蔵さまのお祭りに行くと、近所のおじいさんやおばあさん、おまいりの人たちがたくさんいました。

お地蔵さんに手を合わせている人、おまいりに来た人にあいさつをする人、子どもたちにおかしを配る人、ならんでいる人、みんなにここにこしています。

ぼくたちがおかしをもらい、お礼を言って帰ろうとしたとき、ぼくは後ろから走ってきた子とぶつかって、おかしを落としてしまいました。

「ぶつかってくるから、おかしを落としたやろ。」

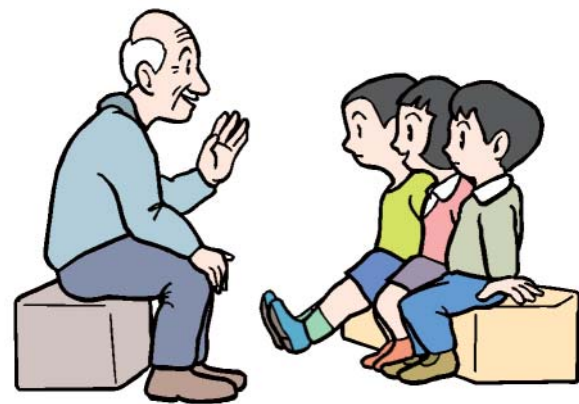
「そっちが見てないから、ぶつかったんやろ。」

と、言い合いが始まりました。



こやすじぞうせん
子安地蔵尊

その時、一人のおじいさんが、
 「こんな所でけんかはやめなさい。二人ともこっちにおいで、……。あんた
 らは、今日のお祭りはどんなお祭りか知ってるか。」
 と、やさしく声をかけてきました。
 ぼくたちは、そのおじいさんの方を見ました。
 すると、おじいさんが、
 「昔は、おまいりにきた子どもに配ってたのは、おそなえにしていたおもぐら
 いだったんや。近所の人たちは、子どもたちが元気に育ってほしいとねがってその



いもを配ってたんや。だから、わしら
 も昔の人と同じ気持ちで、おいもさん
 のかわりにおかしを配ってるんや。」と、
 教えてくれました。

ぼくは、おじいさんの話を聞きながら、
 手に持ったおかしのふくろをじっと見
 つめました。

そして、家に帰ってから、おじいさ
 んが話してくれたことを思い出してい
 ました。

第3学年

<学習指導案>

1 主題名 地域の文化や伝統に親しむ 4-(5)郷土愛

2 資料名 地藏盆

3 本時のねらい

地藏盆のお祭りについて、おじいさんの話を聞いた主人公の気持ちを考えることを通して、
 地域の子どものとして大事に育てられていることに気づくとともに、地域の行事や活動にすす
 んで参加しようとする心情を育てる。

4 主題設定の理由と教材開発

○ 本校は明治6年に創立され、今年で創立135年を迎える歴史ある学校である。現在使っている鉄筋校
 舎には“日本一の学校に”という地域住民の強い思いが込められており、地域住民の誇りでもある。そ
 れだけに、学校に対する期待と愛着も大きい。2年生、3年生と町探検（校区探検）を行い、神社・仏
 閣、公共施設（公民館や地区体育館）、お店など校区内のようすについて学習してきた。それぞれの建
 物・施設の場所や役割等については、普段から利用しているのでよく理解できている。しかし、地域行
 事については、地域を取り巻く環境が変化し、歴史的背景が理解されにくくなり、町全体で盛り上がる
 ところまでには至っていない現状にある。また、児童は、行事やお祭りには参加はしているが、そのい
 われや地域の人々の願いや思いについては、知らない児童も多い。

○ 地域の祭りには、地域の発展を願い、子ども達の健康と安全を願って、多くの人々が協力して続けて
 きた行事がたくさんある。本教材の「地藏盆」は、地域の祭りを題材とした自作資料である。地藏盆は、
 夏休み中に行われる地域の行事で、参加したことのある児童もあり、地域の人々の熱い思いを気づかせ
 るのに適した教材であると考えられる。

○ 児童から見ると、地藏盆に行くとお菓子をもらえる楽しいお祭りである。しかし、地域の人々にとっ
 ては、食べ物の少ない時代でも続けており、「地域の宝物」である子どもたちに、無事に育てて欲しい
 という強い願いがある。この教材を通して、自分たちが住んでいる地域は、昔から村人のため、また子
 どもたちのために、お祭りを続けてきたことを知らせ、地域の一員として意欲的に生活していこうとす
 る態度を育てていきたい。

5 資料の特性を生かす手だて

- ・地藏盆のお祭りを知らない児童にわかりやすいように、実際に祭りを行っている本堂全体の写真を用いる。
- ・資料の中のおじいさんの言葉が具体的にわかるようなお供えの写真を用いる。
- ・資料の挿絵に子安地藏尊の写真を載せ、イメージを持ちやすくする。
- ・ビデオレターという形で子安地藏尊を実際に守っている地域の方に話をしてもらうことで、児童の心に響くようにする。

6 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 自分が続けていることを発表する。 自分が続けていることで自慢できること はなんですか。 ・習字 ・ピアノ ・空手 ・野球 ・サッカー	○続けることの良さを考えさせる。

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>2 資料「地蔵盆」の範読を聞いて話し合う。</p> <p>ただし君たちは、どんな気持ちでお地蔵さんのお祭りに行ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お菓子をもらいたい。 ・お菓子をもらうのが楽しみだ。 <p>お菓子を落とされたただし君は、どんなことを思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お菓子がつぶれるだろ。 ・何でぶつかってくるんだよ。 ・気をつけろよ <p>おじいさんは二人にどんなことを教えようと思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お地蔵さんのお祭りは、昔から続けられてきた。 ・地域の人たちは、子ども達が元気に育ってほしいと願って、祭りを続けている。 <p>ただし君は、おじいさんのお話からどんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おかしがもらえる意味がわかったよ。 ・これからも大切に、続けていってほしい。 ・来年もお祭りに来よう。 ・これからもお祭りに参加していきたい。 <p>3 ビデオレターを視聴する。</p> <p>4 「振り返りカード」を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ただし君たちにとっては、お菓子をもらうことが一番になっていることをおさえる。 ○お菓子を落とされて腹を立てていることをおさえる。 ○地蔵盆のいわれや、地域の人々の願いや思いについて感じ取らせたい。 ○地域の行事や活動に参加しようとする気持ちを持つことの大切さを考えさせたい。 ○地域の子どもとして大事に育てられていることを知らせる。 ○自分ができることを考えさせる。

こんにちは、私は〇〇といいます。私は17年前から、この子安地蔵さんのお世話をさせてもらっています。私の父もそして祖父も同じように子安地蔵さんのお世話をさせてもらって来ました。この子安地蔵さんは、今からおよそ4百年前、この辺りが浜辺だった…(中略)だから、私は今でもこのお地蔵さんを守り、毎年8月の終わりのころに「地蔵盆のお祭り」を続けているのです。



最後にみなさんにお願ひがあります。この大庄地区には昔から大切に受け継いでいる物や、昔から続けている行事がたくさんあります。例えば、みなさんの学校も135年も続いてきていますし、地域のお祭りもそうなのです。

みなさんには、それらを大切に、受け継いでいってほしいと思います。みなさんが大人になった時に、みなさんの子どもや孫に教えてあげてほしいと思います。

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

地域の神社のお祭りに親しんでいる児童は多くいる。しかし、本教材を使用して授業をしたところ、「地域には、こんなお祭りもあるんだ。」と、初めて知った児童がいた。また、お祭りは知っているが、その行事を行っている人々の思いや願いまでは知らなかったという児童がほとんどであった。子安地蔵尊を守り、お祭りを続けている地域のA氏に、ビデオレターという方法で気持ちを伝えていただくことにした。実際に生に近い形で話を聞くことができ、A氏の気持ちが児童にダイレクトに伝わった。

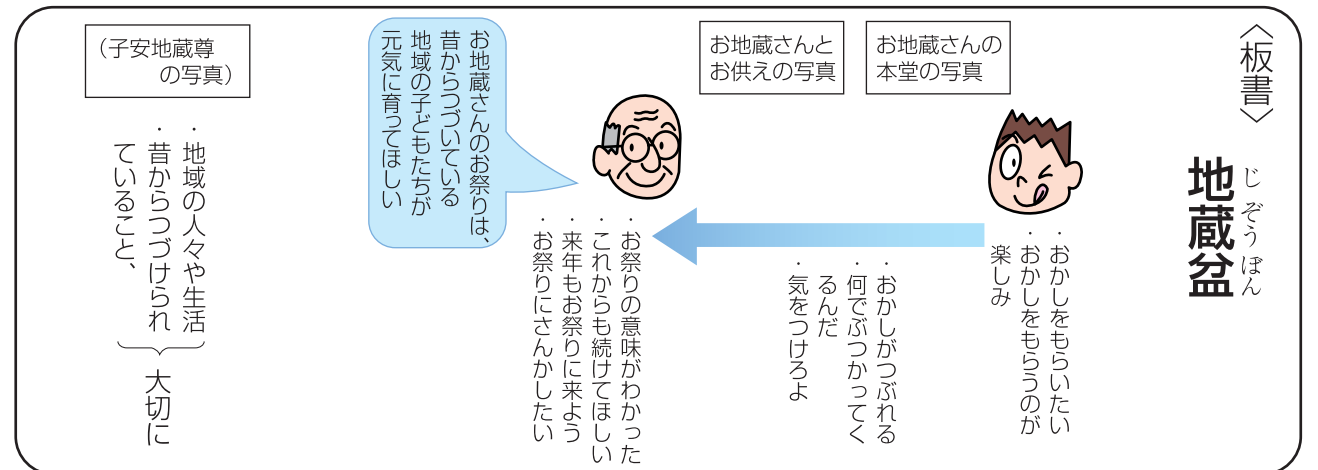
児童の感想

- ・昔から受けつがれていることを、今もやりつづけていることがすごいなあと思いました。
- ・地域のお年寄りががんばっているのがわかりました。ぼくたちも受けついでいきたいと思いました。
- ・来年の地蔵盆のお祭りには行ってみたいです。
- ・道徳の勉強をしてすごく楽しかったです。ぼくもお世話をしたいです。
- ・少しのことでけんかした時に、うれしい話で心を落ち着かせると、いらついた気持ちが一気にふっとんでうれしくなるんだなあ、とわかりました。
- ・ぼくが行ったのは、中津の灯籠祭りというお祭りで2このお寺をまわっておはらいをうけた後、おかしをもらったら次のところへ行きます。この話とにていると思います。「そんな近くでやっているんだなー」とわかり、来年行きたいと思います。



2 今後の課題

- ・本教材の中で子ども同士がけんかをする場面に目を向け、「お祭りでけんかはだめだ。」「ごめんねと言えればいい。」という感想を持った児童もいた。本時の主題を「郷土愛」で進めようとしたが、けんかの場面を挿入したことにより、「なかよし」と捉える児童もいた。資料を作成する際、道徳性を育てるきっかけづくりは、主題に沿ったものでなければならぬと考える。
- ・授業に「いきいき学校応援団」を招くことは、時間的制限（授業をしていただく時間帯に来てもらえないことや、話が長くなること）や内容的制限（話がそれて授業のねらいに即したものでなくなること）があつて難しかった。ビデオレターだと撮り直しができることもあつて活用しやすいが、目の前で実際に話してもらうような迫力には欠ける。



＜中学年教材＞

さいこうじの
西光寺野に水を引く



これは、みなさんの住んでいる現在の西光寺を中心とした田原校区の写真です。大きなため池があり、たくさんの田んぼが広がっていることが分かります。

では、大きな川がないこの西光寺野に、どうして今のようにたくさんの田が広がり、米がたくさんとれる土地になったのでしょうか。

江戸時代、この西光寺野は姫路の殿様の狩り

場でした。大きな松林とごっ草がおいしげり、きつねやたぬきが住んでいました。土地が平らで水田にてきしているため、何度となく開発をころもみてきたそうです。しかし、その度に水が足りずにしっばいに終わりました。この西光寺野は川よりも高いところにあるため、どこから水を引いてくるか……。

これをかい決することが、この土地の人々の昔からの願いだっただけです。

明治38年、前川萬吉さんが郡長になりました。前川さんは、技術員をやとって3年をかけて調査と研究をしました。その結果、水げんを上流のせか村を流れる岡部川からとることに決めました。そして、その当時すでにあった桜池・長池・奥池を大きくして、そこに水をためる計画をたてました。

明治42年、森田久忠さんが次の郡長になりました。森田さんは、この計画を知ると、少しでも早く完成するように立ち上がりました。

森田さんは、まずお金集めをしました。これは、全て銀行から借りることとなりました。用水路をつくるお金、あれ地を田にかえるお金、合わせて41万1550円。今のお金に直すとほぼ100億円です。それを15年で返す計画です。そんな大金が必要だったのです。

次に、岡部川のあるせか村の人たちにお願ひに行きました。ところが、せか村では、「わたらの田んぼに水が来なくなるんじゃないか。」

「大切な水をほかの村にやるなんてことはできない。」

という心配の声がおこりました。せか村のきよかがなければ、計画そのものがこわれてしまいます。そこで森田さんたち役員は、家を一けん一けん回り、頭を下げてたのみました。

森田さんたちのこのすがた姿を見て、せか村の人は、

「おたがいさまだからな……。」

と、ぼつりと言いました。

森田さんは胸をなで下ろしました。

大正元年11月、いよいよ工事がはじまりました。トンネル、橋の水路、地下の水路などいろいろむずかしい工事ばかりでした。一番こんななトンネルは、500メートルもありました。とてもかたい岩を手堀りて掘りました。村の人は、もっこで土や石を運びました。昼も夜も工事を続けました。そのため、たくさんの人が犠牲となっていました。

さらに、用水路のかたむきは長さ2キロメートルに対して深さ1メートルと、見ただけではほとんど水平に見えました。いえ、ところによっては水が逆流するようにさえ見えました。村の人たちの中には、

「こんな平らで、水が流れるのか。」

「この工事の計画は、おかしい。」

「この工事はしっばいだ。水なんて流れてくるはずがない。」

「しっばいしたら、わたらの苦勞が水のあわだ。借金だけが残る。」

と、もんくを言う人もいました。森田さんは、ねむれない日が続きました。しかし、計画を信じ、工事を続けました。

大正3年10月21日、初めて水を流す日です。

たくさんの人が、かたずをのんで見守っています。そうです。用水路が完成したのです。工事をした人も、村の人も、そして森田さんもじっとみつめました。森田さんは、「どうか、うまく水が流れてくれ……。」

と、祈るような気持ちでした。

「来た、来た、来た。水が来たぞお。」

石を押し流す勢いで水が池に流れ込んだのです。

森田さんも、村人も、工事をしてきた人たちも肩をたたき合いました。

森田さんは、今までの長い道のりを思うと胸が熱くなりました。

この用水路は、今もりっぱにその役目を果たしています。

参考文献 「西光寺野開発物語」(岡本敏樹 山内浩二編)
資料・写真 (西光寺野土地改良区)

第4学年

<学習指導案>

1 主題名 郷土のために 4-(5) (郷土愛)

2 資料名 西光寺野に水を引く

3 本時のねらい

郷土開発に尽くした先人の思いに触れ、郷土を愛する心を持つ。

4 主題設定の理由と教材開発

- 本学級の児童は、アンケートの結果、29人全員が「福崎町が好き」と答えている。その理由は、「買い物ができるお店がたくさんあるから」「子ども会などの行事が楽しい」等である。今の生活の便利さや豊かさを理由に地域が好きと答えている。しかし、自分たちが今住んでいる地域がどのように開発されて豊かになり、どんな願いや苦勞があったかということについては、関心が薄いことが分かった。
- 本校区に流れる西光寺野用水とその下に広がる豊かなため池や田畑は、明治から大正にかけて建設・開拓されたもので、その規模は日本最大級のものである。周囲の川より高い位置にある西光寺野台地に水を引くための隧道・暗渠・橋等には、当時の人々の願いや苦勞の跡が忍ばれる。これらの地域遺産にまつわる先人の願いや苦勞を学習することは、郷土に誇りを持ち、郷土を愛する心につながると考えた。
- 本教材の開発・作成にあたっては、西光寺野用水建設にまつわる先人の願いや苦勞を物語風に描くことにした。「この地で米を作りたい」という村人の強い願いを受けて、工事を指揮する立場に立った主人公森田久忠の苦勞、葛藤、そして成功の喜びを中心に描き、その強い思いを感じ取れるように配慮した。

5 資料の特性を生かす手だて

- ・事前に総合的な学習の時間を通して、西光寺野用水を見学したり、日本最大級の西光寺野開拓について「いきいき学校応援団」の方から説明を聞いたりして、自分たちの郷土の大きな開発事業についての知識と関心を高めておく。
- ・当時の工事の様子を捉えた写真や当時の道具を提示し、授業に生かす。
- ・地域の願いを受けて西光寺野用水建設に取り組む主人公森田久忠の強い思いを中心に扱う。
- ・「郷土を豊かにしたい」とする主人公の強い願いを共感的に捉える。
- ・役割演技を取り入れることによって、難工事を指揮する主人公の苦勞や葛藤に迫る。



6 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 総合的な学習の時間に学習した西光寺野用水を想起する。</p> <p>2 資料「西光寺野に水を引く」を読み、森田さんの気持ちについて話し合う。</p>	<p>○豊かに実る田園風景と荒れ野の写真を対比的に提示し、西光寺野用水に関心を向ける。 (プロジェクター)</p> <p>○教師が説明を加えながら、指名読みで読み進む。</p>
<p>森田さんの願いは何だったのだろう。</p>	
<p>(1) 今のお金で百億円もの大金を借金し、瀬加村を一軒一軒頭を下げて回るとき。 ・今までの長年の願いを。 ・岡部川からしか水が引けない。 ・誰かがしないといけない。</p> <p>(2) 困難な工事続きで、村の人から文句を聞き、ねむれない日が続いたとき。 ・工事が続けられるだろうか。 ・村人のために努力しているのに。 ・村人の気持ちもよく分かる。</p> <p>(3) 石を押し流す勢いで水が流れて来たとき、肩をたたき合う村人たちを見て。 ・計画を実行に移してよかった。 ・これで米が作れるようになる。 ・これで地域が豊かになる。</p>	<p>○森田さんの気持ちを中心に扱い、工事を指揮する人の願いや苦勞、葛藤に目を向けるようにする。</p> <p>○なぜ大金を借金してまで実行に移し、瀬加村の一軒一軒を回ってまで頭を下げたのかを考えさせ、その強い願いを感じ取らせる。</p> <p>○当時の工事の様子を表した写真や道具をもとに、工事の困難さを想像できるようにする。 (プロジェクター)</p> <p>○村人の立場、森田さんの立場、それぞれをグループで役割演技することによって、森田さんの苦悩を捉えやすいようにする。 (ロールプレイ)</p> <p>○「今までの長い道のりを思うと胸が熱くなりました。」という文をもとに考えるようにする。 ※自分の金儲けや名誉のためではなく、「米を作りたい」という郷土の人たちの願いが実現する喜びであることを捉えられたか。</p>
<p>郷土の人々の生活を豊かにしたい</p>	
<p>3 アンケートの結果を知り、豊かな郷土のもとを築いた森田さんに手紙を書く。</p>	<p>※森田さんへの手紙の中に、豊かな郷土に住む自分たちの思いを表せたか。 (プロジェクター) (ワークシート)</p>

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

- ・市販の郷土愛をテーマにした資料はたくさんある。しかし、手作りの地域資料は、子どもたちが郷土を深く捉え、考えようとするメリットがあることが分かった。

西光寺野は昔から続いているんだなと思った。ほくのじいちゃんのじいちゃんも西光寺野をつくる村人に入っていたらいいのにな。
今は昔とちがって田んぼや米がたくさんある。みんなのために苦勞してつくってくれたから、ほくたちは、今楽しく住んでいるんだなと思った。

- ・こんなに立派な地域遺産（西光寺野用水）、こんなに努力した先人（郡長の森田さん）のそれぞれを取り上げた着眼点がよかった。
- ・森田さんの願いはすべての人の願いだったので、森田さんに焦点をあて、森田さんを主人公にした物語風の資料であった点がよかった。
- ・授業も、森田さんを中心にして進めることで、具体的に先人の苦労や苦悩が考えられたのでよかった。

西光寺野用水をつくってくれてありがとうございます。あなたのおかげで今も西光寺野の人々は平和に暮らしています。あなたがいなかったら、西光寺野は今も水不足でこまっていたけど、あなたがつくってくれたから平和です。本当にありがとうございます。

森田さんは、勇気を出してこの西光寺野用水をつくったと思った。それは、成功しなかったら借金が残るし、村人に文句を言われたのにつくったからだ。本当にありがとう。

- ・資料を具体的に理解するために、プロジェクターで写真が提示されたので子どもたちに分かりやすかった。

工事でトンネルをほるのは、すごくかたい岩を手でほっていたし、その岩をもっこで何回も、女の人もみんな何回も運んでいた。とてもがんばっていたんだと思った。

今なら機械で工事をしているのに、昔の人たちはこんなに苦労しているとは思わなかった。水が流れてきてよかったと思った。

- ・先人が豊かな暮らしを求めて努力や工夫をしてきた。用水路が今も立派に役立っているという事実を知らせることで、子どもたちの誇りとなった。
- ・郷土の財産を誇りに思う心を子どもたちが持つとともに、田原に住む自信や田原の財産を守っていかうとする意欲、先人への畏敬の念が子どもたちに備わってくれたらという希望の持てる資料であり、授業であった。

たくさんの方が一生懸命つくってくれたことが分かった。これからは水を大切にしていきたい。たくさんの方の願いがこもってつくられた西光寺野用水だから、大切にしていきたい。

- ・役割演技の場面で、人物になりきって大きな声で、自分の気持ちを表現できた子がいたのがよかった。

2 今後の課題

- ・建設のときの生き証人がほとんどおられなくなっている。4年生に呼びかけるだけでは用水建設の様子を知っている人の情報が集まらなかった。全校的に呼びかけて、資料として完成度を高めるとよい。
- ・この資料を完成品ではなく作成途中と考える。どういうねらいで扱うか吟味したら、誰を主人公に持つてくるかが分かる。今後変えていくこともあってよい。
- ・郷土資料としては、最後は郷土愛に結びつけないといけない。森田さんという人物の英雄伝に終わらないよう気をつける必要がある。そのために、はじめのクラスでは森田さんへの手紙を書いたが、あとのクラスでは学習をした感想を書かせた。すると、工事の大変さとともに、西光寺野用水を大切にしていきたいという感想も出てきた。
- ・郷土愛を扱う資料の場合、フィクションを強調する姿勢と、史実を大切にするという姿勢の兼ね合いが大事になってくる。
- ・たくさん写真があるので見せたい。臨場感を出したい気持ちは分かるが、ひとつのテーマに向け提示する写真を精選することも必要である。考えを深めることができる写真を精選することも大事だ。

<高学年教材>

「植村直己さんの外国での暮らし」

みなさんは、「植村直己」という名前を聞いたことがありますか。

植村直己さんは、世界一高い山であるエベレストをはじめ、モン・ブラン、キリマンジャロ、マッキンリーなどの、世界の高い山々に登った人です。

また、アマゾン川六千キロをいかだで下ったり、氷におおわれた陸地を三千キロも犬ぞりで縦断したりしました。さらには驚くべきことは、これらの冒険の多くを単独でおこなったということです。

しかし、単独で真冬のマッキンリーに登頂した後、行方がわからなくなりました。そして、世界中の人々が、このことを残念に思いました。

世界的な冒険家である植村直己さん。みなさんは、どのような人だったと思いますか。

大学の山岳部で一緒だった先輩が植村さんについて次のように話しています。

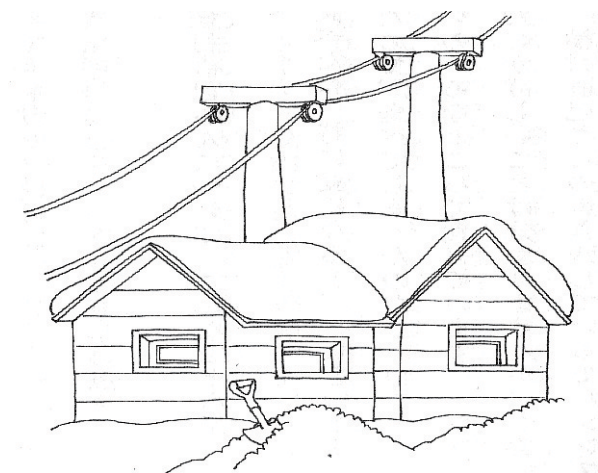
私は、植村直己君とは大学の山岳部で一緒でした。卒業してからも仲良しでした。その植村君は、ヒマラヤという高い山に登ったあと、外国で暮らしていました。久しぶりに彼から来た手紙には「泊まる場所もあります。遊びに来てください。」と書いてありました。私は、久しぶりに植村君に会いたくなり遊びに行きました。

植村君が書いていた「泊まる場所」とは、どんな家だろう。外国の家だからおしゃれな家かな、植村君のこことだから丸太小屋かもしれないぞと胸をワクワクさせていました。

その国に着き、植村君に案内された「泊まる場所」を見ておどろきました。ケーブルの終点にある機械小屋だったのです。小屋といっても、板でかこいをした粗末なものです。ここなら、お金がかからないからと住んでいるのだそうです。私は、ここに泊まらないといけないのだなと思うと、初めのワクワクは、どこかへいってしまいました。

久しぶりに会ったので山の話などをいろいろしました。語り合っていると、夕方になってきました。植村君が、

「夕食にしよう。」



といました。

小屋での夕食です。ごちそうは期待できないなと思いました。案の定、出てきた食事は、わびしいものでした。さめたスープ、かたいパン、うすいサラミ、これだけでした。私は、

「いつも、こんな食事をしているのか。」

と、植村君にたずねました。すると、植村君は、平気な顔をして、こう言いました。

「いつもは、じゃがいもだけ食べているよ。今日のようにパンを食べることはあまりないなあ。」

今、私たちが食べている食事が、植村君にとってはぜいたくなのです。

あたりが暗くなってきました。小屋のすき間からは冷たい風が入ってきます。寒いらしく、植村君もジャンパーを着ましたが、古く汚れているものでした。

ヒマラヤに登るといことは誰にでもできることではありません。ヒマラヤに登った植村君は、いわばヒーローです。そのヒーローのあまりに地味な生活に私はおどろきました。

さらに、植村君は、ここでの生活を話してくれました。

「日曜日外には出ないよ。みんなが遊びにさそってくれるけれど、ことわっているんだ。日曜日は洗濯があるし、次の登山の計画を立てないといけないからね。」

山の話になると、たちまち目が輝くのでした。

思わず私はたずねました。

「でも、遊んだり、おいしい物を食べたと思うだろう。」

植村さんは、静かに答えました。

「そうだね、遊びたいなあ。おいしい物も食べたいし。でも、私は・・・」

そう言ってだまってしまいました。彼は遠くをじっと見つめています。

そして、私の方を向いてニコリとほほえむのでした。



参考文献 『拝啓 植村直己様』 大前孝夫 著 (神戸新聞総合出版センター)

第5学年

<学習指導案>

1 主題名 夢に向かって 1-(2) 勤勉・努力

2 資料名 「植村直己さんの外国での暮らし」

3 本時のねらい

自分でやろうと決めたことに対して粘り強く努力していこうとする心情を育てる。

4 主題設定の理由と教材開発

- 本学級の児童の中には、自ら目標を立てて、それに向かい努力をしている子が何人かいる。学習やスポーツにおいて、一学期から頑張り続け、二学期には、その成果も出始め、さらにながらんでいる。しかし、一方で、目標自体も立てにくく、たとえ立てたとしても、その達成に向けての努力が続けられない子もある。具体的に「生活の中でどのようなことを努力しているか」と問うてみると、学習・スポーツ・手伝い・趣味などが出てきたが、十分に努力しているとはいえない結果が出た。努力の大切さは分かっているが、実際には様々な誘惑に負けてしまい、続けられないのである。
- 本資料は、母校の先輩である植村直己さんを教材化したものである。偉業を達成した植村さんは、児童にとってあこがれと誇りの存在であり、生き方モデルの一つといえる。しかし、華々しい面のみクローズアップされ、そこに至るまでの苦しい道のりについては忘れられがちである。多くの山を単独で踏破するための肉体的トレーニングの訓練はもとより、資金繰りのために質素な生活を送り、日々、目標に向かい努力を惜しまなかった植村さんの生き方には多くの学びがある。児童自らが生活を振り返り、目標に向かい粘り強く努力していこうとする心情を育てるのに適した教材である。
- 授業では、努力や質素な生活について考えやすいように、教材を分割し捉えさせたい。さらに植村さんが貧しい生活を苦ともせず最後には微笑む場面を主発問として問い、努力の意味と大切さを児童が感じ取れるようにしたい。その中で、思いを積極的に出し合い、聞き合えることを目指したい。最後には、児童の生活を見つめ、振り返る場をもつことにより、授業を通して道徳的心情を高めたい。一方、集中して学習しにくい児童に配慮するために、絵や写真を使ったり、具体的な指示を取り入れ、全員が意欲的に学習できる授業をめざしたい。

5 資料の特性を生かす手だて

- ・ 授業の導入で、自らを振り返らせて価値の方向づけをする。
- ・ 植村直己さんの写真を掲示して、興味や関心を引き出す。
- ・ 植村さんの生活を衣食住という観点で整理して、資料の内容を捉えやすくする。
- ・ 植村さんの華々しい面と質素な暮らしを対比的に捉えさせ、目標達成には努力が必要であることを理解しやすくさせる。
- ・ 授業の後半で、目標に向かい努力している面においての自分の生活を振り返り発表し、価値に気付かせ、粘り強く努力していこうとする心情を育てる。
- ・ 各学年の実態に応じて、総合的な学習の時間や道徳の中で植村直己さんについての学習を深めている。

6 指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 生活の中で目標に向かい努力が続けられなかったことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「テレビやゲームの誘惑に負ける」「めんどくさくて続かない」「目標を忘れてしまう」 <p>2 教材文を読んで、植村さんの質素な生活について考える。</p> <p>(1) 植村さんについて知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「エベレスト登山」「犬ぞりでの冒険」「一人で登山をした」 <p>(2) 植村さんの質素な生活について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「植村さんって質素な生活をしているんだ」「お金がないのかな」 	<p>○子どもの実態を出すことから価値の方向付けをする。</p> <p>○写真などを掲示し、興味や関心を引き出す。</p> <p>○総合的な学習の時間での学びを想起させる。</p> <p>○衣食住などの観点から整理させる。</p> <p>○絵などを活用し、質素な生活であったことを理解しやすくさせる。</p>
<p>植村さんが、ニコリと微笑んだ理由について考えよう。</p>	
<p>(3) 植村さんが微笑んだ理由について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「目標を達成することが楽しみのようだ」「辛抱する心が強いなあ」「目標や努力って大切だな」 <p>3 自分の生活の中で目標に向かい努力していることについて発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「毎日、自主学習をしている」「大会をめざしてバレーボールを頑張っている」 <p>4 教師の説話を聞く。</p> <p>5 感想を書く。</p>	<p>○課題に対する思いを道徳ノートに書かせる。</p> <p>○植村さんは、将来の夢のために物質的にも精神的にも辛抱していることに気づかせる。</p> <p>○話し合いがふかめられるようにしっかりと聴かせる。</p> <p>○目標に向かい、努力し続け続ける価値の良さに気づかせる。</p> <p>○ささいな目標でも認める。</p> <p>○児童の作文を取り入れた説話をし、身近に感じられるようにする。</p> <p>○自分の生活と関わらせた感想が書けるようにさせる。</p>

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

- ・母校の先輩である植村さんを扱った自作教材を使用することにより、資料を身近に感じ、真剣に取り組むことができた。

植村さんが主人公の道徳の学習は楽しいです。植村さんは、私の地区出身なので身近に感じられるからです。



- ・質素に生活していたという植村さんの一面がわかり、植村さんに対する見方が深まり、自らを振り返る機会となった。

植村さんは、すごい冒険をして有名人だから、お金持ちかと思っていました。でも、とても質素な生活をしていて驚きました。その中で、夢に向かって努力をなお続けていた植村さんはすごいと思いました。ほくは、がんばったり、がんばらなかつたりしているので、植村さんに負けないようにしたいと思いました。



- ・努力することを自分の生活とつなげて考えさせることができた。

私はバレーボールをやっているけれど、これからも植村さんのように努力を続けていきたいと思いました。



2 今後の課題

- ・「努力」という価値をこの授業だけで扱い終わるのではなく、普段の生活の中でも意識できる指導を継続していく。
- ・自作教材を年間指導計画の中にしっかりと位置づける。
- ・自作教材をどのように活用して授業したかという記録も、資料と共に残しておきたい。
- ・資料自体に、もう少しメリハリをつけ、価値項目がしっかりと捉えられる資料の作成が必要である。
- ・植村直己さんの実兄に、「いきいき学校応援団」として来ていただき、お話をさせていただくことも効果がある。



＜高学年教材＞

淡路島に酪農を ～三原酪農の父 田中萬米～

田中萬米は、明治25年淡路島南部（現南あわじ市）の賀集村に生まれました。島内でも有数の資産家の長男として何不自由なく大きくなりました。ただ、体が少々弱く学校を休まなければならないこともあり、そんな日は自宅周辺の田畑で働く人々の姿をよくながめていました。

農家の人々は、くわや、すきを使って田を耕し、精こんこめて米を作り、裏作には麦を作っていました。

人々の暮らしを支える収入は米にたよるしかありません。お米を作っているのに、白いごはんをおなかいっぱい口にするなどほとんどありません。萬米の家とは全くちがうとても貧しい暮らしでした。

「あんなに一生懸命働いているのに、なぜ人々の暮らしは楽にならないのだろう。どうしたら豊かになるのだろう。」

いつしか萬米はそんなことを考えるようになっていました。

やがて17歳になった萬米は、島を出て加古川市にある県立農学校へと進みました。

そこで学んだことは萬米に大きな衝撃を与えました。海外には淡路島のような小さな島でも豊かな農業を行っているところがあったのです。英仏海峡にあるガンジー島やジャージー島です。そこに住む人々は農業と酪農をくみあわせ、乳牛を飼育し、野菜作りや花作りを行っているのです。田畑の面積はせまいのに、人々の暮らしは淡路島に比べると、大変豊かなものでした。

「淡路島を貧しさから救うのはこれだ！」

萬米はさげんでいました。

20歳になった萬米は農学校を卒業し、酪農という夢を胸に淡路島に帰りました。さっそく乳牛を飼い始め、畑にはえさにする作物も植えました。そして仲間を集め、いっしょに乳牛の飼育を始めました。やがて少しずつ少しずつ乳牛を飼い始める農家が増えていきました。



しかし、しばった牛乳の消毒やビンづめは全て手作業で行うため、牛乳として販売できる量には限りがありました。せっかくしばった牛乳を残してしまってもうけにならないので、20kmもの道のりを毎日天びん棒で牛乳をかついで酪農試験場に運び、バターにしてももらうこともありました。それでも牛乳が残ってしまい、牛乳を川に流さなければなりませんでした。

自分たちの手でバターを作ることも試みました。あまり良いものができずこれも失敗してしまいました。このままでは、牛乳の量が増えても農家の収入はいっこうに増えることにはなりません。

「牛乳を全部売れるようにしなければ。」

頭をかかえる日々が続きました。

「練乳工場がどうしても淡路にも必要だ！」（※練乳：牛乳を煮詰めて濃縮したもの）先進地を見てきた仲間たちも同じことを考えていました。

「淡路島に工場をつくってくれる会社はないのか？」

萬米は日本中の練乳工場にたのんでまわりました。1年以上話し合い、ようやく千葉県の工場が淡路に練乳工場を作ってくれることが決まりました。契約を交わすことができたとき、萬米たちは手放しに喜びました。

「これでもう安心だ。三原の酪農も順調に成長していくにちがいない。」

と、みんなはおおはりきりでした。「牛乳の量を5倍にする」という会社との取り決めのことなど、だれ一人として気にかけていませんでした。萬米たちの目には、明るい将来だけが見えていたのです。

ところがちょうどそのころ、第一次世界大戦が始まりました。そのために物の値段が上がり、牛や牛のえさの値段もだんだん高くなってしまいました。新たに乳牛を飼うなどとてもない話です。子牛が生まれてもえさ代が払えず、高い値段で売れるならばと子牛を売ってしまう農家もでてきました。それどころか、牛を飼うことをあきらめる農家さえありました。

こんな状態では牛乳の量を5倍にするという工場との約束はとても果たせません。牛乳の量を増やすどころか、減ってしまう心配をしなければならなくなってしまいました。会社側からは、

「1年以内に乳不足が解決しなければ、工場はつぶすことになる。」

といわれてしまいました。

第5学年

<学習指導案>

- 1 主題名 地域に誇りを 4－（7）（郷土愛）
- 2 資料名 淡路島に酪農を～三原酪農の父 田中萬米
- 3 本時のねらい

三原酪農発展のために、骨身を惜しまず力を尽くした萬米の姿に感動し、そこにある願いや考えを知ること、自分たちの住む郷土に誇りをもつことができるようにする。

4 主題設定の理由と教材開発

- 郷土というものは、自己の形成に大きな役割を果たすものである。そして、また生涯にわたって大きな精神的支えとなるものである。自分たちの住む地域を学習し郷土に思いを寄せることで、自分と郷土の関わりを深化させることができると考える。心の奥深くにある、ふるさとへの思いをひき出していくことができれば、自ずと郷土を大切に思う心が生まれるであろう。そして、先人達の努力や願いも学習する中で、自分もまたその一員として存在するというところに気づくはずである。心のよりどころとしてのふるさとをもち、自分たちの住む地域に誇りをもつということは、自分自身の存在そのものをも肯定し、自分もよりよくなりたいという気持ちさえも支える源となり得ると考える。
- 本学級の児童は、地域学習を通して、地域が歴史深くかつて学者村と呼ばれていた素晴らしい所であることを知り「うれしい」と感じ、さらにもっと郷土のことを知りたいと関心をもっていた。単に郷土出身の有名人や先人の偉業を知るだけにとどまらず、先人達の努力やその行動にいたる深い思いを考えさせたい。そこで、本資料の田中萬米の、ふるさとやそこに住む人々への熱い思いにふれさせ、自分と郷土との関わりを深めさせたい。また、萬米の孫にあたる方を「いきいき学校応援団」として招き、子ども時代に見た「自分のおじいさんとしての萬米」と、時が経過し現在ご自身も祖父になって初めて気づく「萬米の郷土への思い」についてお話しいただく。郷土の発展に尽くした方をより身近に引き寄せて考えることで、児童がよりよくなりたい、よりよく生きたいと考える気持ちをより一層深めたい。
- 本資料の田中萬米は、幼い頃目に映った、明治・大正にかけての三原の農家のくらしがきっかけとなり、郷土を豊かなところにしたという思いをもった。やがて島外に出て農業を学ぼううちに、郷土・三原（現、南あわじ市）の約半分の面積しかないイギリスの島々の、酪農と農業を融合させた豊かなくらしを知るようになる。「淡路島を酪農の島に」という夢に向かって、その基礎を作り発展に導くまでに様々な苦悩を抱え度重なる困難にもめげず、ひたすらふるさとをよりよくしたい、豊かにしたいと東奔西走した萬米の行いに根ざすものは何かを想像しながら、郷土を愛する、深く熱い思いを感じとらせた。

子どもたちの生活の中で一番身近な産業である農業の現在の形は、ほんの数十年前、先人達の苦勞によって築かれてきたものである。そして、脈々と受け継がれながら今の三原地域の豊かな農業が成り立っている。しかし、子どもたちはその歴史にふれることも、興味を示すことも少ない。そこで、学習を通して時間の流れを意識させたいと考え、資料の教材化を図った。教材化にあたっては、萬米の「思い」までに踏み込んだ指導が可能となる資料にするために、人となりやエピソードを加えた。そのための情報や資料の収集は、文献・書物だけにたよることなく、実際に聞き取りを行った。

考えこむ日は何日も続きました。萬米の頭の中にはガンジー島やジャージー島の風景が浮かんで消えました。

心を決めた萬米は、一人けわしい表情で練乳会社を訪ねました。工場長の部屋に入るなり、必死のおもいで訴えました。

「農家は、牛を飼うえさ代にも困っているのです。今より牛を増やさなければ乳不足は解決できません。そのためのお金を貸していただけませんか。」

「かんたんに金を貸すことはできません。金を出せば本当に問題は解決できるのですか。」

「しかし、今何とかしなければ……。どうか考えてください……。」

萬米は必死になって工場長にいきがりました。

会社側の返事はありません。萬米は力なく帰るしかありませんでした。

次の日も、次の日も萬米は工場長のところに通い続けました。

何日か過ぎたある日、練乳工場の人を訪ねてきました。萬米の必死の頼みが会社を動かし、ようやくお金を貸してくれることになったのです。

借りたお金を手に萬米は、農家を一けん一けん訪ねて歩きました。もう一度、子牛を売らないように説得し、えさ代にお金が必要であればその場でお金が借りられるようにしました。

子牛が生まれる手助けをしたり、乳搾りを教えて回ったりと、考えられる手助けは全て行いました。

そして半年後、約束の牛乳の量を送ることができるようになったのです。この半年の間ほど、萬米が必死になって働いたことはなかったという事です。

その後、三原の酪農は何度となくむずかしい問題にぶつかりましたが、そこにはいつも何とかしようとして、いっしょうけんめいに駆け回る萬米の姿がありました。

そして、大勢の人々が萬米を信頼して、ともに三原の酪農と農業を発展させてきたことが、今日につながっているのです。



田中萬米の銅像

5 資料の特性を生かす手だて

- ・初めに田中萬米の銅像の写真を見せ、授業の導入とする。
- ・再現構成法を用い、話の流れをおさえる。その際に、社会的背景などを説明しながら授業を進め、内容の読み取りがしやすいように配慮する。
- ・内容をより理解しやすいように、言葉カードを黒板に貼りながら、整理していく。
- ・様々な苦悩や困難を抱えるその場面場面で、郷土を愛しよりよくしたいという強い気持ちが根底にあることを感じ取ることができるようにする。
- ・萬米の、ふるさとへの思いや夢がよりわかるように、酪農で栄える淡路島のイメージ図を掲示する。
- ・再現構成法的なあつかいをするため、資料と子どもを結びつける発問が中心発問となる。
- ・道徳ノートには、次の三つの視点から、考えを書くように意識させる。
 - ① わかったわ（新たに知る、わかる、気づく）
 - ② 今までは（学習によって高められた価値観にてらして、今までの自分を振り返る）
 - ③ これからは（②のことをふまえ、今後の自分の在り方について考える）
- ・練乳(今でいう、練乳とは別のもの)、ジャージー島、第一次世界大戦など、補足の必要な語句や難しい言葉は、説明を加えながら授業を進める。

6 指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 田中萬米について知る。	○当時の三原は、農業と酪農中心に行われていたこと、酪農によって定期的な現金収入が得られるようになったことを知らせる。
2 少年時代の萬米について、分かったことを発表する。	○再現構成法を用い、話の流れをおさえる。
3 貧しい暮らしをしている人がいることを知ったときの萬米の気持ちを考える。	○裕福な家庭に育ったことをおさえる。
4 農学校で萬米が抱いた思いについて考える。	○幼い頃に、何不自由なく育ちながら人々の貧しい暮らしに気づき、そこに疑問や何とかしたいという思いを感じたことに気づかせる。
5 牛乳が残ってしまい、「完売できないし収入は増えない」という問題に直面する萬米について考える。	○酪農を始めることで、ふるさとが豊かになると信じ、熱心に勉強に励む萬米の姿を想像させる。
6 軌道に乗るかという喜びも束の間、戦争によりさらに大きな問題にぶつかる萬米の気持ちを考える。	○次々に困難がおそい悲観にくれるが、それでも立ち向かっていく人間性に気づくようにする。
7 練乳工場へ必死に頼みこみに行くが、応えてもらえなかったときの萬米の気持ちを考える。	○今度こそ駄目かもと追い込まれ、それでも夢をあきらめず、努力し続けたことをおさえる。
8 何日もたって、やっと資金を援助してもらえることになったときの萬米の気持ちを考える。	○酪農の存続はもう不可能かもしれないと、考え込む姿を想像させたい。
9 そこまで骨身を惜しまずに働いた、その行動にいたる萬米の考えを想像する。	○今度は乳量確保に全力を注ごうと強く決意したこと、その後考えられる手だては全てし尽くすにいたる過程に気づかせたい。
10 「いきいき学校応援団」のお話を聞く。～「自分の祖父としての萬米」「萬米の郷土への思い」を軸に	○ふるさとやそこに住む人々を愛し、大切に思う心・ふるさとをよりよくしたいという熱い思いに気づかせたい。
	○郷土の発展に尽くした人をより身近に引き寄せて考えさせたい。

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

授業では、あきらめずに最後まで努力し続けた萬米に感銘を受けた児童が多く、1-(2)勇氣・努力の価値に傾きかけた。授業からみた、子ども達の意見の実際は、「どんなことにもあきらめないで一生懸命がんばった」「考えられる手だてはすべて行った」という萬米像がより強く印象に残っていたが、「いきいき学校応援団」の話により、自分たちの住む郷土に誇りをもつという、本来のねらいに軌道修正ができた。授業のねらいなどを事前打ち合わせ十分に話し合っておいたことが、功を奏した。「応援団」には、本資料の田中萬米が第7代目にあたり、大事に育てられたが、幼少時代は体が弱く床に伏せることが多かったこと、そして、その間に様々なことを考えたり見たりする機会が多かったのではないかとことを聞くことができた。また、家ではふつうのおじいさんであったが、辛抱強く、慎重で、徹底して淡路島をよりよくしたいということに心血を注いでいたことを聞き、子どもたちは、郷土の発展に尽くした人をより身近に引き寄せて考えることができた。「応援団」から見た、おじいさんとしての田中萬米は、風邪を引いて床に伏せることがあっても決して部屋にだれも入れず、ひたすら天井を向いて微動だにせずに次の為すべき事を考えていたという。徹底した慎重さで、完全に病気が完治するまで、次の事へは行動を移さなかったというエピソードも聞くことができた。そのような姿勢が、事業を成功させるにも人一倍慎重を期し、優れた能力を発揮するにいたったことが手に取るようにわかり、田中萬米の人となり子どもたちも感じる事ができた。また、体が弱かったことが幸いし、よく考える人になったこと、家の人が期待する進学は果たせなかったが、農業高校で将来の夢をつかんだことなど、自分の人生をポジティブに受け入れ、進むべき道を自らの力で見いだしていくことの大切さを、わかりやすく話して下さった。ふるさとを愛する強い気持ちで、骨身を惜しまずに行動をおこした萬米に、子ども心に「やるべきことをとことんやる姿勢」を感じ圧倒されたという、孫から見たおじいさん像もわかった。様々なエピソードを交えてのわかりやすく筋の通ったお話に、子どもたちは田中萬米を遠い人ではない、近く存在とすることができたようである。自作の地域教材による授業では、既存の資料に比べて、資料をより身近にとらえることができ、その感動はより大きなものとなることが実感できた。道徳ノートには、「萬米さんが、淡路島が大好きで大切に思ったように、自分も淡路島のことが本当に大好きです。」「淡路の生活がよくなったのは、田中萬米さんのおかげです。いつかこんな人になりたいです。」といった思いを書く子どもも多数いた。

2 今後の課題

- ・社会科で産業（農業）を学習する、5年生で授業を行ったが、第一次世界大戦などという戦争について学習した後の6年生3学期くらいの方が、より歴史的背景をつかみやすいかもしれないと感じた。
- ・たいへん長い資料であるので、1時間ではなく2時間扱いにし、内容の読み取りに時間をかけた方が、より考える時間をとることができ、効果が上がることも考えられる。
- ・淡路島を、イギリスのジャージー島のような豊かな島にしたいという自分の夢や、強い願いと、地域の人のためとなることを自分の夢と考える崇高な人柄を感じられるような発問・思考の流れをつくっていかたいと反省した。
- ・今回は、「応援団」との打合せで、授業者の意をくんでくださることができたために、話の内容を調整しながら、より価値に近づけるように配慮いただくことができた。「応援団」との意思の疎通が大切であること、予め授業の流れなどを十分に知っていただく事の必要性を感じた。
- ・総合的な学習の時間に、地域につくした人々の聞き取り学習や調べ学習を行い、実際に田中萬米のことを調べていた子どももいた。その学習の発表の時期と、この「田中萬米」の道徳授業を行う時期をずらすことによって、子どもたちのほとんどは、道徳授業で初めて「田中萬米」の存在を知ることになった。しかし、予めある程度のことは知識として知らせておいた方が、より授業の流れがスムーズになったかもしれない。

＜中学校教材＞

のり養殖に賭ける

「あいつアホとちゃうか。このくそ寒いのに、水の中入って何しよんどい。」という周囲の声をよそに、男は、海に突き出た竹に次々と網を結わえていった。流れの速い明石の海に網をとられまいと、その手には自然と力が入る。胸まで水につかり、かじかむ手をとんど（たき火）で暖めながらの作業であった。

熱い思いを胸に秘め、黙々と作業をしていたのは高浜光次さん、当時45歳。明石林崎の漁師である。

昭和38年の冬、彼は海の異変に気づいていた。

「いつものようにタコが捕れない。」

長年、タコ漁で生計を立てていた彼も、こんな経験は初めてであった。零度以下の真冬日が続く記録的な低温によってタコの卵がふ化せず、極端な不漁になっていたのである。

「このままでは村が危ない。皆の生活を守るにはどうしたらよいか？」

このとき彼は、以前、明石の水産試験場の技師から聞いた、こんな話を思い出していた。

「冬場に海岸で手掴みされていた岩のりは、最近では網を使った養殖技術の発達で、人工的に作ることが可能ですよ。明石でもやってみてはどうですか……。」

数日後、愛知の水産試験場に向かう彼の姿があった。ここは日本で初めてののりの人工養殖に成功した場所で、協力者も多くいた。明石と愛知を何度も往復しながら、試験場では養殖のいろはを学び、地元の漁師からは養殖のコツを教わった。必要な網や道具をそろえ、準備は順調に進んでいった。いよいよ明石に帰る日、種付け（網にのりの胞子を付ける作業）の済んだ網がトラックに乗せられ、妻の待つ林の海へと出発していった。



浮きに網を張り、錨で海上に固定する

初めて収穫されたのりは、浜で待つ奥さんの手で半紙大に漉かされていた。しかし、流れの速い海で育ったのりは腰が

強いので、天日で乾かすと穴が開き、食べると硬くて売り物にならなかった。以来、光次さんとのりとの格闘が始まることになる。

収穫したのりを真水で洗ったり、機械で細かく刻むことでのり自体を柔らかくする技術を導入し、試行を繰り返した。「あそこでのりが採れた」と聞けば、

全国どこへでも足を運びのりづくりをその目で確かめに行った。また、海が荒れたときには、網ごと流されることもしばしばで、初めの3年間は収入もなく、奥さんの採るわかめを売って生計を立てていた。近所の人からは、「あそこの家は、何食



浮きの先の棒に網を引っ掛け、空気をふれさせる

べとんねやろ。砂でも食べよるんやろか。」と言われたこともあった。しかし、のり作りの仲間が増えるにつれ、種付け、あみ網は張り、収穫、加工を分業で行えるようになり、養殖面積も少しずつ増加していった。

彼は言う「その場所に合うたように工夫せんといかん、自分の頭で考えんと……。」と。

数年後、自宅で大勢の仲間と語り合う光次さんの姿があった。仲間との情報を交換しながら“浮き流し”と呼ばれる養殖法を皆に広めるためである。“浮き流し”は、海に浮かべた浮きに網を結びつけ、錨で海面に固定するやり方で、竹の立たないような深い海でも養殖できる画期的な方法である。特に、いかだを組んで網を海面から浮かせる方法（網を一定期間、空気に触れさせることで、ケイ藻の繁殖を防ぐ）は、彼が開発した技術で、それまで海岸まで運んで網を干していた重労働から人々を解放した。彼は、頼まれれば岡山や広島など各地に足を運び、技術の指導にもあたった。

明石の海でこの方法が広まると、のりの生産量は一気に増加し、品質も向上していった。

「明石ののりは色が黒うて歯触りがええ、噛めば噛むほど味がでる」と言われ、現在では兵庫県で年間15億枚、全国3位の生産量を誇るまでになっている。彼は言う。

「みんな、あかんかったら、すぐやめてしまおう。うまいこと行くまでガマンでけへん。」

妻のみさえさんは、「近所の人から『あんたところは、どこからも援助を受けんと一人で努力したんやから、勲章をもらえませ』と言うてくれる人もありました。けど、明石の海では一人では絶対でできません。一緒にやる仲間がおったからのり作りが成功したです。」と言って笑った。



収穫は船が網の下に潜り込み、機械で刈り取る

ともに大正生まれの二人はが笑顔で視線を送る先には、いつもと変わらぬ明石の海が広がっていた。

中学校(第1学年)

<学習指導案>

- 1 主題名 強い意志 1-(2)
- 2 資料名 「のり養殖に賭ける」
- 3 本時のねらい
人間の意志の強さに気付き、他者と協力しながら困難と向き合おうとする態度を養う。

4 主題設定の理由と教材開発

- 兵庫県、その中でも明石が海苔の大産地になった陰には、高浜光次さんの努力が欠かせないだろう。特に、浮き流しの技術を改良して大量生産を可能にしたことは、今なら特許が取れる技術にも相当するが、それを余すことなく仲間たちに伝え、のり養殖の普及に貢献した功績は大きい。そして、彼は決して自分一人の功績とせず、仲間と協力したからこそ成功したと考えている。自然を愛し、郷土の発展に貢献した光次さんの生き様は、将来を担う生徒の良い手本になるだろう。
高浜光次さんは、のり養殖のパイオニアとして、迫りくる困難に立ち向かっていった。彼は、常に新しいことに挑戦しつつ、他者と協力しながら常に創意工夫を続けた。その決してあきらめない態度は、今の私たちに勇気と希望を与えてくれるだろう。
- そこで本教材では、のり養殖を町の主要産業に発展させた恩人に光を当てることで、子供達に先人への感謝の気持ちを持たせたい。また、それと共に、特に1年生の時期においては、これからの中学校生活の中で起こりうる様々な困難に対して、仲間と共に立ち向かう態度や共に学び続けることの大切さに気付かせることにより、これからの中学校生活を考えさせる契機とさせたい。

5 資料の特性を生かす手だて

- ・準備物として次のような物が必要と思われる。
読み物資料 ワークシート 寿司用のりorおにぎり のり養殖作業の写真
- ・導入においては、明石の名産品を発表させることで、自分の住んでいる地域に対して関心を持たせると共に、明石のりの実物を見せることで、本時の内容についての理解を深めさせる。
社会的授業にならないように注意し、のり養殖に関する提示資料はできるだけ多くすることで生徒に興味を持たせる。
- ・発問においては、個人で考えさせる発問と班で考えさせる発問とに区別し、より良い意見が導き出せる方を選択する。
また、時間的な配慮より、発問をカード化することも必要だと思われる。
発表の仕方は、班としての意見はカードに書かせて掲示する方法も有効だと思われる。

6 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 明石の名産品を発表する。	○明石は昔から北部は農業、南部は漁業が盛んだったことを知らせる。
明石の名産は何でしょう？	

【予想される意見】



キャベツ
鯛・穴子
タコ
明石焼き
のり

2 教材資料を読む。

3 光次さんが言った「その場に合った工夫」とはどのようなことなのかを文中の内容をもとにワークシートに書き出し、発表する。

光次さんの言う「その場に合った工夫」とはどのような工夫でしょう？

【予想される意見】



・深い海でも養殖できる、錨で網を固定する「浮き流し」という方法。
・そのままでは硬いので、真水で洗ったり、細かく刻んで柔らかくする。

4 光次さんは自宅で仲間たちと何について語り合ったのかを文中の内容をもとにワークシートに書き出し、発表する。

光次さんは、自宅で仲間たちと何を語り合ったのでしょうか？

【予想される意見】



・それぞれの情報交換
・みんなの意見を聞きながら、養殖方法を広めていく。
・仲間との交流を深めながら、更なるのり養殖の工夫を考える。

5 のり養殖が成功した理由について、文中の内容をもとにワークシートに書き出し、発表する。

のり養殖が成功した理由は何だったと思いますか？

【予想される意見】



・仲間との協力
・前向きな姿勢
・何事にもあきらめない
・頑固さ
・心が広い

○出てきた意見を板書する。

○おにぎりを提示しながら、おにぎり用として明石海苔の需要の高いことを知らせるとともに、本時の内容について伝える。

○範読しながら読ませ、写真を掲示しながら海苔養殖作業の補足説明を行う。

○明石の海の特徴に触れ、光次さんが工夫したことを読み取らせる。

○出た意見を板書する。

○技術の普及だけでなく、他からも意見を聞くとする学びの姿勢があることに気づかせる。

○光次さんが他者から学び、工夫を重ねながら、仲間と協力していったことが成功の理由であったことに気づかせる。

6 資料を読んだ中から浮かんでくる光次さんの印象を班で話し合い発表する。

光次さんは、どのような人だと思いますか？

【予想される意見】



・顔だけを見ると怖そうだけれど、自分が決めたことは最後までやりきる人。
・みんなのことも考えてあげられるやさしい人。

○高浜光次さんの生き方から、目標に向かって努力し続けることの大切さに気づかせる。

7 ワークシートに本時の感想を書く。

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

- ・普段からよく目にしている「海苔」を取り上げ、また、普段、海に行けばよく目にする光景が、海苔の養殖だったということに気づき、生徒自身にも親しみやすい教材だったと思われる。
- ・本文の中に「明石の海苔は色が黒うて歯触りがええ。噛めば噛むほど味が出る」という言葉があることから、海苔を味わいながら食べるようになった生徒もいるようだ。
- ・この教材を扱ってから、ほんの一部ではあるが、今までは行き詰まるとすぐ投げ出していたような生徒が、粘り強さを見せる場面も見られるようになってきた。
- また、主人公の言葉や態度から学んだことなどをキーワードとした授業中の発言も見られる。
「その場に合ったように工夫せんといかん。自分の頭で考えんと…」
「みんな、あかんかったらすぐやめてしまう。うまいこと行くまでガマンでけへん。」
- ・生徒のワークシートからは、ねらいに沿った内容の感想が多かったように思えた。



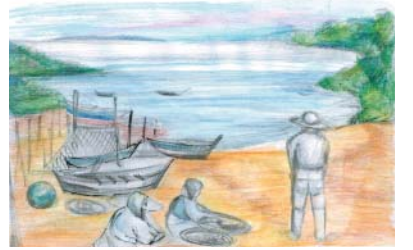
・仲間と協力することが、どんなに大切かがよく分かり、夢に向かって努力する人に私もなりたいと思いました。
・自分が色々な方法を生み出したのに、何も自分がやったようなことは言わないし、しかも、みんなに感謝していてすごいと思いました。私もそんな風に生きたいなあと思いました。
・私も友達や仲間にやさしく、気が配れるような人になりたい。そして、どんな時代になっても「努力する」という事を忘れたくない。
・最後まであきらめないことも大切だけれど、やっぱり、仲間や支えてくれた人たちと成功を喜び合えることが一番大切なことなんじゃないかなあと思いました。

2 今後の課題

今回の地域開発教材の取組において、学年ごとに、1年生では「強い意志」を主題に『のり養殖に賭ける』、2年生では「校風の樹立」を主題に『北中の歴史』、3年生では「地域の発展」を主題に『原人祭り町興し』の3つの教材を作成したが、まだまだ不十分な部分が教材資料の面や指導案の面で多々みられるので、部分的な修正を加えながら次年度につなげて行きたいと思っている。

<中学校教材>

「為せばなる 漁業一筋 山田岸松物語」^{きしまつ}



「税金を払へ！」

そう詰め寄った税務署員が、一瞬ことばを詰ませた。あまりに粗末な身なりの漁民と、閑散とした浜辺に引き上げられた、傷んだ漁船が数隻が目に入ったからだ。昭和28年夏のことであった。署員は涙ぐみ、何も言わず去っていった。

「わしら零細な漁師には、なんにも払えるものはないんじゃ。カネができれば、こっから払いに行くから、それまで待っていてくれ。」

須磨から垂水にかけての海辺。一人の男が遠くの海を見ながら、つぶやいた。

「わしら漁民は何とかせなあかん。」

その男、山田岸松は明治42年12月25日、神戸市須磨区（当時は武庫郡須磨村）^{むこうぐんすまむら}若宮町に生まれた。岸松の家は代々漁業を営んでいた。^{わかみやちょう}尋常高等小学校高等科を卒業すると、すぐに父の岸蔵を助けて大阪湾へ船を漕ぎ出し、父と網を引いたが、あまりに厳しい生活状況にいつも疑問を抱いていた。

「なんでいくら働いても暮らしが楽にならんや。周りの者の目も、漁師に冷たいのはなんでや。わしら漁師は、人に認められるようにならんといかん。」

そんな気持ちを抱きながら、陸軍兵士として太平洋戦争に召集される。

戦争が終わり、40歳を過ぎていた岸松は、復員するとすぐに漁業の振興・発展に走りまわった。戦前以上の食糧難に加え、燃料不足。資材不足は廃品利用や工夫によって耐え忍んだが、その日暮らしの漁師生活は相変わらずだった。

岸松は、まず「年間通して漁師が働ける環境」を作りたいと考えた。当時の漁師は春から秋にかけては漁が行えたが、冬には出稼ぎに行くしか暮らしを支える方法がなかった。手始めに岸松は、自分の少ない資金を元手に、船の燃料を貯蔵・荷さばきする油槽会社を設立し、いつもは遠方に出稼ぎに行く漁師たちを働かせた。

戦後の経済が上向きだすと、神戸にも油槽所が増え始めた。岸松は、油槽所での季節労働の使命は終わったと考え、今度は漁師たちが漁場で一年中働けるようにしたいと思い始めた。そこで、当時、三重県を中心に盛んだった冬の漁業「海苔の養殖」を神戸でもできないかと思案した。実際に三重県などに視察に行き、瀬戸内海での「海苔の養殖」が可能かを調査し、できると判断した。それは、塩屋沖の潮流・河川の流入が海苔の生育に適していたからだ。しかし、初めは棹による養殖をしていたため、棹が何度も波に流され失敗した。その後、苦勞を重ね、錨で網を水面に固定する方法を採用することで、何とか軌道に乗り始めた。

こうして軌道に乗り始め、成功するめどがつけかけた頃、途中で抜け、他の地域へ出稼ぎに行っていた漁師たちが次々と垂水に戻り、海苔の養殖をやりたいと言い出した。この仕事を任されていた者は、その身勝手さに腹を立て、断ろうとした。その時、岸松は責任者を叱った。

「よく聞け。海苔^{のり}の養殖でみんなが伸びていくのだ。塩屋だけが伸びるのではない。また塩屋だけをとっても、お前らだけで伸びるのと違う。そんな世間の狭いことを考えていて何ができるか。これでみんなが食べていけると思ったら、もう一度みんなに『戻って来い』と言ってやるのがお前の立場ではないか。反対する者があれば、それを説得するのがお前の役目ではないか。」
責任者は首を縦に振った。

「次は、港だ。」と、岸松は考えた。

昭和30年代に入っても、まだ、全国的に漁港は整備されておらず、船を留めるには砂浜に引き上げるしかなかった。もちろん、高波が襲えば、すぐに船は波にさらわれてしまう。台風が来れば、船を国道近くまで引き上げるしかない。そんなことをすると船はますます傷み、修理だけでもかなりの出費となる。

岸松は、何度も市や県、さらには国に陳情^{ちんじょう}に出かけた。だが、いくら陳情^{ちんじょう}をくり返しても話が進まない。岸松は「小さな漁協がそれぞれで陳情^{ちんじょう}しても効果はない。」と判断した。当時、神戸市西部(駒ヶ林・東須磨・東垂水などの漁協)の7つの漁業協同組合は利害が対立し、協力は難しかった。岸松は力を合わせる必要性を説き続け、何とか合併を成し遂げ、大きな力に変え陳情^{ちんじょう}を重ねた。

漁港の整備は国全体の港湾整備^{こうわんせいび}に関わる問題のため、予算編成上からも容易に国の計画に組み入れられるものではなかった。しかし、数年の後の昭和38年、ついに岸松の執念は実り、垂水漁港の整備が国の計画に加わることになった。

一方で、漁協の合併は燃料の統一価格を生み出し、経済的にも漁師を助けることになった。

後年、岸松はさらに兵庫県漁業界全体の団結を図る。過去に何度も失敗し、不可能と言われていた兵庫県(淡路島・内海^{うちうみ}・但馬の漁協)の3つの漁業協同組合の合併をも成し遂げた。

この県漁協の合併は、後の公害による被害の際、大きな効力を発揮することになった。もちろん、岸松が初代の理事長に就任した。

昭和40年代後半に環境汚染問題や赤潮の異常発生が起こった。岸松は漁業関係者を代表して、漁師の被害の実情をあちこちへ訴えてまわった。このことが「公害防止全国漁民大会」の開催につながり、被害に備え、積立金を準備しておくなど、後の日本の公害対策のモデルとなった。

高齢になっても、岸松の漁業に対する思いは、弱まるどころかますます燃え盛った。

岸松は、常に時代の先を見つめ、新しい方策を編み出した。その一つが「とる漁業から、つくり育てる漁業へ」を合言葉に栽培センターを設立したことである。ハマチなどを養殖し、資源管理型漁業(栽培漁業)を実現した。漁業と都市の調和なくして、未来の漁業は成り立たないとの確固たる信念からである。

また、この信念が、岸松に平磯海釣り公園、神戸マリニピアの計画・建設推進役という役割を与える。それは「市民の憩いの場」を垂水の浜に造るという、まさに、漁民と市民の共存共栄を図ろうとするものだった。

まだまだ道半ばであった平成2年9月23日、岸松は腎不全のため82歳で亡くなった。残念なことに、神戸マリニピアの完成を見ることはなかった。

亡くなる直前、岸松は自分の人生をこう振り返った。

「勇気を持って事に当たれば、何とかなる。為せばなる。」

今や、社会の漁業への理解は深まり、漁師(漁民)の地位向上も果たされている。そして、垂水の海神社にある赤鳥居に立つ岸松の銅像は、今も未来の海を見つめ続けている…。



中学校(第2学年)

<学習指導案>

1 主題名 郷土愛 内容項目 4-(8)

2 資料名 「為せばなる 漁業一筋 山田岸松物語」

3 本時のねらい

海や港が身近にある垂水に生きる生徒たちに、漁業に生きた先人の前向きな姿勢に触れることにより、自分たちも何か郷土のためにできることをやろうとする意欲や態度を育てたい。

4 主題設定の理由と教材開発

○ 本校の校区は、気さくで親しみやすい下町の良さを今に残している。そうした土地柄のためか、生徒同士の人間関係は和やかで、人なつっこい。

生徒の日常的な様子を見ると、地域の活動への参加はあるものの、地域への関心はさほど持ってはおらず、まだ、自分自身が地域の一員であり、将来は自分も地域を担う一人になるという意識はない。こうしたことから、地域に尽くした先人のモデルを提示することで、まず、生徒たちに地域への関心を持たせたい。

○ 今回の資料は、地域に尽くした先人の資料(追悼文集「漁業一筋 あすを求めて」—山田岸松さんを偲ぶ—)を用い、また山田岸松氏の人生を辿るにあたっては、生前の山田氏を知る方へのインタビュー(ご子息で現在の神戸市漁業協同組合理事長)を元に話を構成した。山田岸松氏は、自分たちが行ったことのあるマリニピアや平磯海釣り公園などの設立者であることから、生徒たちはより一層の興味・関心を寄せられるであろうと期待できる。

これまで本校が人物を取りあげた道徳資料としては、一般的な偉人を扱ってきた。今回は、自分たちが知る地域に尽くした先人という点で、違ったアプローチができるはずである。今後も、地域に関わりのある人々についての研究を深め、継続的な指導を心がけ、郷土に誇りを持たせたい。

5 資料の特性を生かす手だて

・導入の際には、地域の先人を扱うということで、垂水の身近な食べ物(いかなごや海苔)や施設(平磯海釣り公園やマリニピア、海神社)などを実際に示すことで、生徒に普段の実生活に関連した内容を学習するという親近感を抱かせる。

・特に、漁港ができるまでの垂水の漁村の様子は、昭和30年代の垂水や須磨の浜辺を撮った写真を見せることにより、当時の厳しい漁師生活にも気づかせたい。

・内容については、ややもすると「世のため、人のために骨身を惜しまず働き通した人生を称える」といったことのみで終始するおそれもあるため、発問に配慮し、特別な学歴や地位も無い市井の人間が、「何とかしたい」という信念を原動力として、周囲の協力を得て、多くのことを成し遂げていくという、前向きな生き方をつかめるように留意をしたい。

6 指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1. 垂水の名物について思い浮かべ、答える。 ・いかなご・海苔・漁港・海釣り公園 など</p> <p>2. 資料を読み、考える。</p> <div style="border: 1px solid #f8d7da; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(1) この頃の岸松ら漁民をとりまく状況はどうだったか。</p> </div> <p>・いくら働いても暮らしが楽にならない ・周りの者の目も漁師には冷たい ・「わしら漁民は何とかせなあかん」</p> <div style="border: 1px solid #f8d7da; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(2) 岸松はどんな問題にぶつかったのか。</p> </div> <p>〔問題〕 1 冬の漁師の出稼ぎをどうする？ 2 漁師が漁場で1年間働くには？ 3 垂水の漁港の整備はできないか？ 4 漁師の声を国に伝えるには？ 5 つくる漁業ができないか？ ※ 漁民と市民の調和が図るには？</p> <div style="border: 1px solid #f8d7da; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(3) なぜ岸松が問題を乗り越えられたか。</p> </div> <p>・漁師が苦しい生活から抜け出すには、どうすれば良いかを懸命に考えていた ・漁師の生活の安定、低い地位を向上させたいという信念があった ・自分のことだけでなく、いつも漁師全体のことを考えていた ・力を合わせることを考えて、ばらばらだった漁師の協力を生み出した ・いつも漁業のことを考え、新しい方法を生み出した(アイデアや先見性があった) ・最後まであきらめない姿勢があった</p> <div style="border: 1px solid #f8d7da; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(4) 岸松が自分の人生を振り返り「為せばなる」と言ったのは、どのような思いからか。</p> </div> <p>・あきらめずにやりぬけば何とか実現できる ・自分だけでなく、周囲の人のことを考えてやれば、協力してくれる人も出てくる</p> <p>3 感想を書く。</p>	<p>○実際に見せる。(海釣り公園などの写真の提示もよい)</p> <p>○教師が範読。難しい語句は範読後に説明。</p> <p>○漁村の写真も掲示をし、生活状況を想像せる。 ○漁師の生活の不安定、地位の低さを何とかしたいと考えていたことをつかませたい。</p> <p>○様々な問題にぶつかったことを思い起こさせる。必要に応じ再読し、板書を工夫する。 〔解決〕 1→「油槽会社」の設立 2→「のりの養殖」への挑戦 3→「垂水の港」の整備 4→「漁協の合併」 5→「栽培センター」の設立 ※→平磯海釣り公園、マリニピア設立</p> <p>○岸松の行動の裏にある思いを生徒に発言をさせる。 ※違う視点の発言も活かし、岸松の人柄や周囲の人についてのイメージも持たせたい。 (例)「岸松は人間的な魅力があった」 「岸松に協力して、がんばった人もいたと思う」 「いったん離れた人たちが、海苔の養殖をやりたいと言った時、いやがる人に『世間の狭いことを考えてはいけない』と怒った。岸松は心が広い」</p> <p>○意見を共有し、できるだけイメージを持たせたい。</p> <p>○地域社会の一員として、自分の住む地域への関心・意欲が高まったか。</p>

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

地域教材を用いた授業は、生徒の普段の生活とかかわりが多い地名や、よく知るものを取り上げられるため、これまで本校が取り上げてきた、いわゆるマザーテレサなどの偉人などの資料と違い、生徒は「知ってる、知ってる」といった直接的な関心を示し、資料を身近なものとしてとらえることができた。

生徒たちは導入で「知ってる、知ってる」と言いながら、今回の学習で学んだ山田岸松氏のことを知る生徒はいなかった。このように、「知っている」と思っている、身近な地域に“信念を持って物事に立ち向かった人”がいたことは知らなかったという意外性も、生徒が関心を高めた一つの要素であったと感じる。こうした意味でも、山田岸松氏のような人物や、垂水に伝わる話、文物に気づかせる資料は意義深いと思える。

今回の資料開発にあたって、職員室での教師仲間の何気ない会話の中で「海神社の赤鳥居のところに銅像があるけど、銅像になるくらいやから、何かええことをした人と違うか？」という一言から全てが始まった。日頃何気なく見過ごしている中に、地域に関わりのある意義深いことがらがあることに気がついた。

- ・いつも、祭りで海神社には行っているけど、まさか、赤鳥居の横の銅像が岸松さんとは知らなかった。今まであの像はまったく気にしていなかった。今度海神社に行ったときは確かめてみようと思う。
- ・漁師を何とかせんとあかんと考えて、一生懸命やって、協力しないと力が出せないと分かって組合を合併させた。岸松さん自身のがんばりがあったけど、岸松さんを支えたたくさんの人もいたと思う。そういった人たちもいて垂水漁港や海釣り公園もできていったと思う。
- ・こんなに身近なところに、立派な人がいたことにビックリした。



2 今後の課題

今後も、今回の学習で得られた山田岸松氏のように、身近な地域にまだまだ教師も生徒も知らないような“物事を為し続けている人”がいることを気づかせる意義ある取組を継続できるよう、教材発掘に努力し、題材として取り上げ、親近感を抱かせ、生徒が生き方のモデルとして接することで、自分自身を振り返り、前向きに地域への関心を持ち、自分もできることがあれば地域に役立ちたいと思えるよう、指導していきたいと考える。

<中学校教材>

心だけが残った日

平成7年1月17日5時46分兵庫県淡路島北部を震源とする大地震が発生し、阪神・淡路北部を直撃した。この地震は関西地方を中心に東は関東、西は九州まで揺れを感じた。気象庁は、この地震を「1995年兵庫県南部地震」と命名した。

震源地 淡路島北部 震度 7 マグニチュード 7.2

直下型のこの大地震は阪神間に住んでいた我々全員を震撼とさせた。1月17日から26日までの間に人体に感じる余震は、計116回にも及んだ。この地震での死者は、6,279名(平成8年2月6日現在)、負傷者34,900名(平成8年2月6日現在)にも上った。

宝塚市においては、死者118名(男43名、女75名)(平成8年6月4日現在)、負傷者2,201名(重傷60名、軽傷2,141名)(平成8年1月22日現在)で、死傷者の多くは倒壊した建物等の下敷き等による圧死であった。

現在、大型児童センター「フレミラ宝塚」勤務のAさんも、この日を必死で生きた人の一人であった。彼女は震災の時、社会福祉協議会に勤務していたが「あの日は忘れられない。」と次のように語ってくれた。



混乱状態の中、職場に電話しなければと思った。家の電話は通じなかった。近くのコンビニに公衆電話があったの思い出した。そこまで電話をかけに行こうと決めた。娘に「ガスの元栓をしめておくこと、揺れがきたら、机の下に隠れること」を伝えてコンビニへと急いだ。

「まだ中学生でしょ、娘は。とても一人放って仕事に行く気には・・・。」と当時を思い出して話してくれた。

行く道で不思議な光景を見た。何人もの人が無言で小さな荷物をもって歩いていた。顔ははれあがっていた。誰もが無表情で同じ方向へと進んでいた。

「この人たちはなんなんだろう？」 そうだ、小学校へ避難している人たちだと気づいた。私たちも避難しなければ・・・。

コンビニでは電話に行列ができていた。やっと電話ができた。「今日は休んでもいいか」と聞くと、「明日は出てきてくれ。」という社会福祉協議会の同僚の声が返ってきた。子どもがいるから、気を遣ってくれていると思いながら、コンビニで食料を買い込んで、家に戻った。

テレビをつけた。「仕事に行く途中で撮影しています。」という声がテレビから聞こえ、阪神高速が鉛細工のようにぐにゃぐにゃになったり、落ちたりしている映像がながれていた。初めて見る映像だ。想像を越える地震、理解を越える被害状況だった。自宅は危ない。娘と二人、近くの小学校に避難した。その間もテレビのカメラマンの声が、ずーっと頭の中で続いていた。

あのカメラマンも被災者にちがいがなかった。みんな被災者なのだ。私たちがかかわっているお年寄りたちは、ちゃんと避難したかしらという思いが空っぽだった頭の中に沸き上がってきた。お年寄り一人ひとりの顔が次々と浮かんでは消えた。カメラマンの声は、私に仕事の重さを思い出させていた。私の背を押していた。「ごめん、ここにいて。」と娘を避難所に置いて職場へと向った。宝塚市総合福祉センターもすでに避難所となっていて、みんな忙しく働いていた。大変だと感じた。総合福祉センターの避難所に娘を移した。

次の日の最初の仕事は、ソリオ(宝塚駅前ビル)のボランティアセンターの片づけから始まった。そして、その日から休みのない仕事の日々が続いた。



江戸時代の宿場町として栄えた小浜地区では「町家」の多くが全半壊となった

(参考) 震災対応

宝塚市災害対策本部 1月17日午前6時 設置 庁舎グランドフロアー

第1回対策本部会議 1月17日 12時30分

社会福祉協議会による第2次避難所の設置・運営 (要援護者対応24時間ケア付き避難所)

1月17日～5月21日

震災対応ボランティア本部 1月21日 設置 庁舎グランドフロアー災害対策本部横

業務内容：ボランティアの受付と業務のコーディネート

社会福祉協議会からボランティアコーディネーターを派遣してもらう

(参考) 社会福祉協議会とは

市町村社会福祉協議会(「社協」と略す)は、市町村ごとに組織され、多様な福祉ニーズに応えるため、それぞれの社協が地域のボランティアと協力しながら地域の特性を踏まえ創意工夫をこらした独自の事業に取り組んでいる。主な事業は次のとおり。

- ・住民の地域福祉活動の支援・ホームヘルプサービスやデイサービスなど福祉・介護サービスの実施・行政など公的機関からの委託事業の実施・福祉サービス利用の相談窓口・障害者や高齢者の見守り活動の推進(高齢者や障害者・子育て中の親子が気軽に集える「サロン活動」などの実施・安否確認活動)福祉教育の推進・民生委員・児童委員協議会の運営・市区町村共同募金委員会の運営(別組織ではあるが、事務は社協の職員が兼務をしている)

中学校(第3学年)

<学習指導案>

1 主題名 地域社会に貢献する気持ち 4-(1)

2 資料名 「心だけが残った日」

3 本時のねらい

母親として娘を思う気持ちと仕事上の役割や責任の重大さとの間でゆれながら、仕事の重さを自覚し、責任を果たそうとする気持ちを学ぶ。

4 主題設定の理由と教材開発

現在の中学生は震災の時は1・2歳で、体験はもちろん、記憶もない。自分たちの町にも阪神・淡路大震災という大きな震災があったこと、その時どう対処し、どう生きたのかを私たちは伝えていかねばならない。壊滅状態の悲惨な中で、多くの身内を失った悲しみに耐えて生きるために日本全国からボランティアや義援金を初めとする応援があったことを伝え、助け合いやボランティア活動の大切さを理解させたい。表面に見えるボランティア活動とそれを支える行政側の誠実な活動の両方がかみ合って、宝塚市は、行き届いた震災対応をすることができた。

Aさんの体験談は娘に対する親としての気持ちと重要な立場にある仕事との間で揺れながら、人間として大切なものをしっかりととらえて働いた人の回想である。

また、第2時で扱う新聞記事は、震災時のボランティア活動に関係したものである。宝塚に限らず、被災状況の中では、ボランティア活動が大きな役割を果たしている。この資料から、非常時の経験を将来の知恵につなげたい。

第3時では、震災時にボランティアコーディネーターをされていた方を講師に迎え、ボランティア活動についての話を聞き、これからの活動の仕方を学ぶ。

生徒たちは、経済的には何不自由なく育てられ、一人ひとりはやさしさや思いやりを十分にもっているが、一方甘えや依存も強く、そのやさしさや思いやりも自己中心的な行動と表裏一体でもある。また、学校を中心とした人間関係(友だち)はできているものの、地域に根ざした関係は相変わらず希薄に思える。

震災等の非常時に、自分のため、他人のためにやさしさや思いやりの気持ちをもっと自由に発揮して、地域や社会に関わっていく人であって欲しい。そのためには、目の前の現実に私たち普通の人が自分のできることを実行することで、十分に役立つことや、自分の仕事に誠実に関わることで十分に責任を果たすことができることに気づき、勇気を出して行動できるようにしたい。

5 資料の特性を生かす手だて

阪神・淡路大震災の資料、社会福祉協議会の仕事の内容などの資料を用意して、大震災を知らない生徒たちに実感をもたせて授業をする。

指導計画

第1時 阪神・淡路大震災を追体験し、被災者でもあるAさんの震災の記憶を中心に自分の関わっている仕事の役割と責任を感じ、地域社会に貢献していく姿を学ぶ。

第2時 非常時の組織ーボランティア活動の資料から、ボランティア活動が地域の復興や発展に欠かせないことを学ぶ。また、ボランティア精神を本校のキャリアスタッフ制度につなげたい

第3時 阪神・淡路大震災の時にボランティアコーディネーターをされていた方から「震災時のボランティア活動」の体験談と「これからのボランティア活動」について話を聞く

資料：第2時 新聞記事(「非常時の組織」：宝塚市のボランティアコーディネートを扱ったもの)・キャリアスタッフの目的 第3時 ボランティアコーディネーターのプロフィール・感想文記入用紙

6 第1時 展開例

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
阪神・淡路大震災の写真(ビデオ)を見る。 阪神・淡路大震災について話す。 資料「心だけが残った日」を読む。 1 最初から「・・・家に戻った」までのAさんの気持ちを班で話しあう。	○事実を正確に伝える。 ○自分の経験やその時の思いも加えて自分たちの町に起こったことを実感できるように話す。 ○落ち着いて読みきかせる。
『職場に電話しなければと思った』のはどうしてだろう？ 予想される生徒の回答 ・様子を知りたいから ・仕事を休んで家を片づけたいから ・子どもが心配でやすみたいから	
『今日は休んでもいいか』と職場に尋ねた時の気持ちは？ 予想される生徒の回答 ・仕事を休んで家を片づけたいから ・子どもが心配で一緒にいてやりたいから ・余震があるから	
2 班で話しあった内容を発表する。 3 「テレビをつけた。」から後のAさんの気持ちの変化を捉える	○人間として、母として、当然の感情であることを確認する。
テレビをつけてから、Aさんの気持ちはどう変わっていったらだろう？ 最初にカメラマンの声を聞いた時 予想される生徒の回答 ・こんな中でも仕事をしている ・大変な地震と被害だ 近くの小学校に避難した時 予想される生徒の回答 ・みんな被災者なのだ ・お年寄りは無事に避難したかしら 娘を避難所において職場へとむかった時 予想される生徒の回答 ・娘がかわいそう ・きっとお年寄りが不安になっている ・人手が足りないだろう	○大変なことになっているだろう。 災害弱者(障害者や高齢者)はどうしているだろう。 ○仕事上の責任感、仕事の内容の重さに気づかせる。 ○人間として大切な気持ちの中に、娘を守ることと、困っているであろう人たちに関わる仕事の両方があることに気づかせる。 ○与えられた仕事ではなく、自分がしなければならない仕事をするのが大切であることに気づかせる。
誰もが被災者の中で、自分がしなければならないこと、自分のできることをしっかりとすることの大切さを伝える。心のノート p 85、p 100～p 101をしておく。	

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

関連の授業を終えて、生徒のノートや感想文をみると、社会福祉関連の仕事の重さと大切さを感じ、同時にボランティアの必要性や好ましいボランティア活動について、今後ボランティアをしていくことを前提に感想を書いていた。

また、自分たちの地域で起こった災害を素材にしたので、知っている地名や学校名等が出てくる。

生徒たちは、地域の高齢者に思いをはせながら仕事の重みを考えることができた。また、本校で毎週火曜日に集いを開いている高齢者のグループ「いっぷく」さんが、震災時のボランティアグループとして活躍した人たちであり、お互いに心を寄せ合うことを大切にしていることにも気持ちを新にしたようだった。

2 今後の課題

予定の時間数では少々不足気味であった。たとえば、宝塚市の社会福祉協議会は現在課題となっている24時間ケア付き避難所を、阪神淡路大震災の時に、すでに開設運営していた。このことについても触れたいと思ったが、できなかった。

また、地域社会に貢献することを、(1) 仕事として (2) 地域住民としての2方向から捉え、本校が力を入れているボランティア活動「キャリアスタッフ制度(生徒会活動)」へと結びつけようというねらいでスタートしたが、(1) 仕事としてだけに絞ったほうがもっと授業が深められたのではないかと思う。



・福祉関係だけではなく、いろんなボランティア活動があることを知った。身近なところで、人の役に立ちたい。
 ・私も、福祉関係の仕事をめざしているけれど、やっぱり大変な仕事だし、責任が重大だと思った。絶対仕事を優先させないといけない仕事だと思う。将来がんばりたい。

・いざという時は、子どもや家庭優先がいいと思う。この人の場合は仕事の関係で仕方ないけど。
 ・ボランティアにも、ありがたいボランティアと迷惑なボランティアがいることを知った。ボランティアもリーダー性が必要で、指示待ち人間ではだめだとわかった。良いボランティアになりたいと思う。

<中学校教材>

はりま でんとうぎ ほう
播磨の伝統技法「うっとり彫り」を守る
 まつ やたい かざりかなぐしよく
 ~祭り屋台の鋳金具職~

播州は祭りが盛んなところです。10月に入ると200余りの神社で秋祭りが行われます。播州の秋祭りの最後を務めるのが、毎年10月21日、22日に行われる魚吹八幡神社(姫路市網干区)の秋祭りです。魚吹八幡神社は、播州最大の氏子数を抱える神社で、「提灯練り」が有名です。宵宮には、伊勢音頭に合わせ、提灯を掲げた青竹を烈しく叩いてこわし合うのです。これは平成19年3月に兵庫県無形文化財に指定されました。本宮には、屋台18台、壇尻3台、獅子などが練り出されます。屋台練りにも特徴があり、重さ約2トンの屋台を、ひざの高さから頭上に一気に差し上げ、そして「チョーサ」の掛け声とともに放り上げ、受けとめるのです。勇壮で華麗な祭りです。神社に保存されている天保11年(1840年)の祭礼絵馬は、江戸時代の祭礼行事の姿をよく伝え、当時の祭りの様子を知ることができます。



屋台練り「チョーサ」



100年の伝統がある「糸井」の屋台

祭りに欠かせない屋台は、本体を作る大工、彫刻をする彫り師、塗りをする漆師、鋳金具を作る鋳職など数々の職人たちの、技術・文化・歴史が凝縮されています。秋のさわやかな空の下、屋台の屋根には、龍と虎、獅子と鷲、鳳凰など、力強く優雅な鋳金具が金銀に輝いています。祭り屋台は、職人の技が結集した重さ2トンの「動く工芸品」なのです。

魚吹八幡神社の9地区の、屋台・壇尻の鋳金具の制作・修理を手がけている職人さんが、太子町に住むTさん親子です。Tさんは、見る者を「うっとり」させると言われている、播磨地方の伝統技法である「うっとり彫り」を守り通す鋳職人です。



屋台の屋根



屋台の高欄

「うっとり彫り」は、銅板や銀板などの地金をタガネでたたき、龍や虎などの絵柄を立体的に打ち出します。地金の厚さは1ミリ以下で、最大10センチ以上打ち出す播州の伝統技法です。まず、下絵を墨汁で和紙に描きます。仕上げは破れにくいフェルト紙にします。金具の出来映えを想像して描くことが大切です。温めた松ヤニの固まりの上で一心にたたきます。破れないようにするには経験がものをいいます。松ヤニは夏と冬では固まる温度が違うので常に調節しなければなりません。湯をわかすので夏でも暑い仕事場です。大切な仕事の道具であるタガネは手作りです。切る・平らにする・たたき出す・模様を刻むなど、用途により数十種類を使い分けます。手作りのタガネは2000本以上あります。祭り屋台1台の制作に4ヶ月、銅板が畳3枚分必要なこともあるそうです。



下絵：龍



地金をたたくタガネ

Tさんは、小学4年で銕職人のおじさんが経営する店に見習いとして入り、職人の道を歩み始めました。もともと手仕事は好きでしたが、修業は並大抵のものではありませんでした。下絵の練習をしてもなかなか認められずすぐに破かれ、寒い冬でも氷の張ったたらいで材料を洗い、毎朝5時に起きて腕を磨きました。仕事中に話をするとすぐにたたかれました。「うっとり彫り」の技は先輩の仕事を見て盗みとったそうです。今、その技は息子さんに引き継がれています。

Tさんは言います。

「自分から進んで息子に教えたことはない。教えられたことはじきに忘れる。『盗め』です。播磨の職人芸を私一人で終わらすことはできない。でも、いくらやっても一人前になれる。一生勉強です。定年はありません。死んでから、誰が手がけた仕事なのかと話題になるのが誇りです。」

Tさんは、技を見込まれ、姫路城の小天守閣の窓わくなど国宝や重文の修復も手がけました。平成9年には、「現代の名工」として卓越した技能の持ち主に贈られる賞も受賞しました。

「受賞には感動しましたが、責任の重さを強く感じます。いい加減な仕事はできません。若い人に負けないよう頑張ります。」

息子さんは、Tさんの技を引き継ぎ、世界にひとつだけのものを作るという、手作りにこだわります。えんぴつは手放せないそうです。

「型を使う鑄物は大量生産できるし、機械を使って大量生産するところもある。」
「手作りでも分厚い彫りはある。でも、屋台をかつぐ人にとって重たすぎではいかん。軽くて重量感のある彫りをせなあかん。それが職人の技やと思います。」

「屋台の注文主は自治体です。納期は決まってるけど、大切な思いがこもったものやから、意見がまとまるのに時間がかかる。でも、苦勞して作ったものを、自治会の方々が涙を流して喜んでくださる。仕事のやり甲斐を感じる時ですね。しんどさとおもしろさ両方あって喜びにつながります。」

祭りを数日後にひかえて、Tさんの仕事場は遅くまでタガネの音が響きます。祭りの当日も、屋台の金具が壊れることが必ずあり、徹夜仕事になることもしばしばです。太子町「糸井」の屋台は、明治32年に作られたもので、100年間大切に大切に使われています。屋根が浅く、江戸時代後期の面影を残す貴重な屋台です。新しい屋台を作るだけでなく歴史ある屋台の修理も、Tさんにとっては大切な仕事です。

息子さんがぼつりと一言こぼしました。

「ホンマは、祭りに使わんと飾っというてほしいんやけどね。みなさんの祭りにかける熱い思いにしっかり応えないとね・・・」



うっとり彫り：獅子



Tさん制作の銕金具をつけた屋台

【参考文献等】

- ・Tさんの息子さんからの聞き取り
- ・Tさん平成9年労働大臣表彰「卓越した技術者」（現代の名工）新聞記事
- ・神戸新聞総合出版センター「播磨の祭り」
- ・(社)姫路青年会議所「意を打ち技を整る」
- ・書写の里美術工芸館編集ビデオ「播州の銕金具～うっとり彫り～」
- ・魚吹八幡神社等秋季大祭に関するHP
- ・サンテレビ「魚吹八幡神社秋祭り」

中学校(第3学年)

＜学習指導案＞

1 主題名 伝統や文化を尊重する心 4-(9)

2 資料名 「播磨の伝統技法～うっとり彫り～を守る」

3 本時のねらい

伝統技法を守ろうとする職人の使命感にふれ、地域に伝わる伝統文化を尊重する心情を養う。

4 主題設定の理由と教材開発

- 郷土に伝わる鋳金具の伝統技法「うっとり彫り」を守り受け継ぐ職人の生き方にふれ、伝統の重みやその大切さに気づかせる教材である。また、精巧な鋳金具を目の当たりにすることで、伝統技法の素晴らしさを実感することもできる。鋳職人の思いを通して、地域に生きる伝統技法の重みを感じ、その大切さに気づくのに適した教材である。
- 本校では、「心のカルテ」と称して、学年当初に道徳心情アンケートを実施している。これは、「心のノート」を参考に23項目それぞれに2個の設問を作成し、生徒の心情をさぐるものである。この結果から、いくつかの課題が明らかになってきた。自尊感情を高める取組が必要なことと、身近な郷土への愛着が低く、郷土に息づく伝統文化にも積極的にふれようとしにくい現状に何らかの取り組みが必要なことである。生徒の日常生活の中では、伝統文化に触れる機会も乏しく、人間の手によるものづくりなどへの理解や関心が低いのも現状である。そこで、自己肯定感の伴う生き方を育成するためにも、地域の優れた取組や、地域の先人の業績を学ぶことで、自分の住む地域に対する愛着と誇りを抱かせ、自己の生き方の指標とさせたいと考え、本教材の開発を進めた。
- 魚吹八幡神社の秋季大祭は長い歴史があり、地域の人々の生活に深くとけ込んだ行事である。本校の体育大会で毎年取り組んでいる「西中ソーラン」では演技の一部に、秋季大祭宵宮に行われる「提灯練り」の時に謡われる「伊勢音頭」や、祭りで使われる「シデ」を取り入れたりもしている。このように、生徒にも馴染みがあり興味関心を持てると思われる題材を教材化することに決めた。また、地域には、祭りには欠かせない屋台作りに長年携わっておられ、卓越した技を持つ鋳職人がおられる。お話を伺う中で、Tさんの伝統文化を守り伝えようとする仕事への使命感と、職人としての誇りを、生徒に学ばせたいという気持ちが高まっていった。
- 本教材を通し、我が国の優れた伝統文化や技術についての理解を深め、先人の知恵や技術が凝縮された伝統の技の豊かさに気づかせながら、その伝統文化を尊重する心情を養いたい。また、職人の技に対する真摯な態度を学ばせ、人間としての自負に基づく職人魂や使命感にふれさせるとともに、自己をふりかえり、これからの生き方を考える契機とさせたい。

5 資料の特性を生かす手だて

- ・資料には、祭りや彫金に関する専門的な用語も多いので、生徒の理解を深めるために視聴覚教材を併用する。
- ・Tさんの仕事を撮影したビデオは、一枚の銅板が見事な匠の技で立体的な作品へと変貌をとげる様子を映し出して、職人の技の巧みを感じることができる。また、Tさんが本校に寄付してくださった「うっとり彫り」で作られた校章を直に手に取ることで、優れた職人の技を知ることができる。手づくりの本物にふれるということは、何にも代え難い体験になると思われる。
- ・氏子として祭りに直接関わる糸井地区の生徒には、授業の導入で、1年生であれば、小学6年生で屋台の「乗り子」を務めた感想や、3年生であれば、来年からは実際に屋台を練る意気込みなどを語らせ、授業の雰囲気盛り上げる。

6 展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 地域の祭りについて知っていることを発表する。</p> <p>2 資料を通読する。</p> <p>3 Tさんの「うっとり彫り」の技法の特徴を発表する。</p>	<p>○ 校区内に稗田神社、魚吹八幡神社、阿曾神社の氏子がいることを知らせる。</p> <p>○ 専門的な用語については解説を加え、生徒の理解を助ける。</p>
<p style="text-align: center;">うっとり彫りの凄さとは何だろうか</p> <p>・すべて手づくりである。</p> <p>・手づくりだから、同じ物は一つとしてない。</p> <p>・見た目は豪華で重量感があるが、屋台練りを考えて地金をぎりぎりまで薄く打ち出している。</p> <p>・見る人を本当にうっとりさせる技がある。</p> <p>・手づくりで失敗が許されないので、集中力がある。</p> <p>・一つ一つ丁寧に作業していき仕上げるのだから、出来上がりまで相当な想像力が必要。</p>	<p>○ ビデオ「播州の鋳金具うっとり彫り」を見せ伝統技法「うっとり彫り」への理解を深めさせる。</p> <p>○ 厚さ1ミリ以下の地金を最大10センチ以上打ち出すという、熟練した技が必要であることを理解させる。</p> <p>○ 屋台を練る人のことを考えて、軽くて重量感のある彫りを可能にするのが職人の技であることに気づかせる。</p>
<p>4 鋳金具作りにかかるTさんの熱い思いを考える。</p>	<p style="text-align: center;">Tさんの仕事への使命感と誇りはどこからくるのだろう</p> <p>○ 鋳物や機械を使って大量生産するのではなく、一台一台心をける職人の心意気に共感させる。</p> <p>○ 伝統技法を伝承し、豪華で美しい彫りを守る職人の仕事への誇りと使命感を感じとらせる。</p>
<p>・死ぬまで一人前はない、一生勉強です。</p> <p>・伝統技法を自分の代で終わらせることはできない。</p> <p>・氏子の感嘆の声や笑顔が、自分を支えてくれている。</p> <p>・しんどさとおもしろさ両方あって喜びにつながる。</p>	

<授業実践を終えて>

1 取組の成果

生徒にとって見慣れた屋台であるが、銑金具をじっくりと見た経験はなく、銑職人の仕事を見たのも初めてであった。屋台についている銑金具は一つ一つ心をこめて作られ、職人の魂がこもったものなのだと、匠の技と心意気に感動したようである。自分たちの地域にこんなにも素晴らしい技をもった職人さんがいることに驚き、伝統ある屋台に益々の誇りを感じている。県下一と自負する「チョーサ」ができるのも、重さをぎりぎりまで抑えた「うっとり彫り」があってこそだと気づき、「うっとり彫り」が見る人の心を魅了するのは職人の誇りがあるからだ、Tさんの作品に見入っている姿が印象的であった。また、「一生勉強」という職人の仕事にける思いに心をうたれ、何歳になっても自分自身を磨いていく生き方に、自分の生き方を見つめる生徒もいた。



Tさんのように、あんなにきれいな屋台を作っている、さらに、技術を高めていこうとするなんて、その意欲がすばらしい。僕は、何事もだいたい満足してしまうところがあるので、もっと上を目指すという気持ちを大切にしていきたい。そして今ある自分の夢に生かしていきたい。

私は小さいときに引っ越してきて、初めて屋台を見たときは、何も思わなかったけれど、だんだん大きくなり、祭りに参加するたびに糸井の屋台が好きになっていきました。屋台が作られるまでに、あんなに手間がかかっていて、しかもすべてが手作りということにとっても驚きました。美しさを考え、かつぐ人の気持ちも考え、みんなの熱い気持ちも考えた、そんな職人さんの思いがこめられた屋台が、自分たちの住む糸井の屋台であるということ、とても誇りに思いました。

2 今後の課題

道徳心情アンケートで、「今住んでいる地域の歴史や文化について関心がありますか」の問いに対して「はい」「どちらかといえばそうだ」と答えた生徒は約24%と非常に低い結果であった。そうした実態の背景には、地域行事への参加の低さや教科の授業における地域教材の掘り起こし、及び、その活用の不十分さが色濃く反映しているように思われる。郷土を愛し伝統を尊重する心情を育てるためには、道徳教育だけでなく、こうした体験や学習活動が不可欠である。

本授業に関しては、Tさんの仕事に対する熱い思いを生徒に伝えるために「いきいき学校応援団」として招いたり、職場見学をさせて頂いたりすることによって一層学習が深まっていくと思われる。実体験する中で、これからの自分の生き方を深く見つめさせたり、今の自分と対峙させたりすることができると思われる。

第Ⅱ章

道徳の時間への 「いきいき学校応援団」の導入事例

篠山市立大山小学校54

南あわじ市立榎列小学校57

道徳の時間への「いきいき学校応援団」の導入事例

1 「いきいき学校応援団」の導入のねらいと期待できる効果

(1) 導入のねらい

・地域や保護者の中には、様々な仕事に従事する人や特技を持った人がいる。また、地域活動の指導者、伝統文化の継承者、地域の自然に詳しい人などがある。これらの人々に「いきいき学校応援団」として道徳の時間への参加を依頼し、ねらいに関わる自らの体験や、児童に対する期待、思いなどを語ってもらうことは、児童が多様な生き方にふれるという点から貴重な機会となる。

(2) 期待できる効果

・地域から「いきいき学校応援団」として授業に参加いただくことで、児童にとって、自分の生き方を考える機会が広がるとともに、地域のよさも知ることができる。

2 「いきいき学校応援団」を導入した道徳の時間

6年生の授業で

(1) 本時のねらい

・資料の主人公である、江戸時代の俳人「西尾武陵^{にしお ぶりやう}」の子孫であるAさんに、生家や俳諧資料を守り伝えられている思いや意義について、児童に直接、話をさせていただくことで、教師の作成した自作資料だけでは伝わらない本物の価値にふれさせ、児童の道徳的価値の自覚を促す。

(2) 「いきいき学校応援団」を生かす手だて

・「総合的な学習の時間」や社会科などで、地域を学びの場とした体験的な学習や問題解決的な学習を展開し、児童に地域の文化や歴史について十分に興味や関心を持たせた上で、「生き生き学校応援団」を招く本時の授業を行う。

打ち合わせのポイント
教科等との関連指導

○授業のねらいや話していただく内容、時間について、直接、会って何回も打ち合わせを重ねる。
○事前指導として、新聞や雑誌などに載っている俳句や他校の児童の優れた俳句を紹介し、日常的な話題として取り上げる。また、国語科の単元「感動をリズムにのせて」の学習と関連づけて、俳句作りを日常生活の中で継続して行い、本授業での指導の効果を高める。

資料の工夫

○資料は、読み物資料を作成し、その中で西尾武陵の代表的な俳句を三句取り上げ、説明を加えながら武陵の人生を紹介する。

授業展開の工夫

○歴史的価値の高い肖像画の実物をお借りして教室に掲示する。また、代表的な俳画や生家の写真、テレビ映像なども用意し、資料の理解を助ける。
○あらかじめテレビの取材でAさんが西尾武陵への思いについてインタビューを受けられている映像を児童に見せ、その後、本物に登場していただいて、より児童にわかりやすく話をしてもらうという工夫をする。
○Aさんの話の中でも、俳句を使って西尾武陵への思いを語ってもらうために、事前に俳句を作っておき、担任が話に合わせて掲示する。
○授業の最後には、地域の特産の焼き杉で作った額に児童の俳句が書かれた短冊を入れて、篠山市立歴史美術館で開催されている「西尾武陵展」に展示し、企画展を小学生なりに盛り上げることを伝え、余韻を持って終わる。

(3) 授業の概要

○主題名 : 文化や伝統を大切する心を 4-(7)郷土愛

○ねらい : 日本語の素晴らしさを理解し、それを守り育ててきた地域の先人の努力を知り、地域の文化や伝統を大切にしようとする態度を育てる。

○導入する応援団 : 資料の主人公である江戸の俳人「西尾武陵」の子孫であるAさん。

○資料及び内容について : 「西尾武陵と俳句の心」(自作資料)

本資料は、江戸時代に一つの文学として大成された俳句を扱ったものである。紹介する人物は、江戸時代後期に全国的に有名になった俳人、西尾武陵である。武陵は1766年に大山上地区に生まれ、庄屋、篠山藩の台所方を務めながら家業である酒造業に励み、俳諧の道も極めた。当時、専門の俳人は全国行脚をすることが主流である中、むしろ武陵は大山にいながら諸国の俳人を家に迎えて交流を深め、俳句の腕を磨いた。武陵の生家は今も子孫の手で保存され、俳画や茶室などの多くの作品や建物が残っている。

本資料を通して、武陵の俳句や大山への思いを追究することにより、地域の文化への愛着を一層深め、言語感覚や自然に対する感受性も磨くことができる。

導入部分では武陵の肖像画や句集、俳画などの貴重な実物資料を提示して児童の興味を喚起する。展開部分では武陵の三つの句の鑑賞を中心にして授業を進め、武陵の生き方や俳句に対する思いについて話し合いを深める。



西尾武陵

○展開例

(●応援団の導入)

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
つかむ	1. 西尾武陵の句、「初雪や黒頭山の朝ぼらけ」の情景や作者の思いを想像する。	○ この句を西尾武陵の作だとは伝えずに、児童に身近な黒頭山が詠まれた情景や作者の思いを想像させる。
みおとす	2. 西尾武陵について知る。 ※この大山にも、江戸時代に全国的に有名な俳人がいたんだ。 ※大山でどんな俳句を作ったのだろう。	○ 雪の降る西尾家と黒頭山の映像を見せる。 ○ 西尾家に伝わる、武陵の肖像画や俳画、生家の写真などを提示し、江戸時代の大山の俳人、武陵についての興味を喚起させる。
せまる	3. 資料「西尾武陵と俳句の心」を読んで話し合う。 (1) 資料を読んで思ったことを日頃の自分の俳句作りと関連させて発表する。 (2) 大山で、俳句を通して武陵は何を表現しなかったのか話し合う。	○ 俳句作りの難しさや楽しさを想起させ、同じ篠山の自然を対象に詠まれた武陵の作品と比較させることにより、俳句の奥深い世界にふれさせる。 ○ 全国行脚をせずに、大山にいて俳句を極めようとする武陵の強い意志や葛藤を想像させる。
	武陵は、この大山に残り、どんな思いで俳句を作り続けたのでしょうか。	
ふりかえる	(3) 武陵の俳句が江戸時代から時を越えて、現代の人々まで受け継がれ、広まっている理由を考える。 4. 大山という地域について自分の考え方がどう変わったのか話し合う。 ※武陵さんや大山の自然や文化についても、もっと調べていきたいな。	● 映像で、西尾武陵の子孫であるAさんの武陵に対する思いを紹介する。 ● Aさんに地域の文化を知り、守ることの大切さについて話していただく。 ○ 篠山市立歴史美術館の西尾武陵展に児童の作品を展示することを伝え、今後の俳句活動に対する意欲をさらに高める。

○授業を振り返って

- ・「応援団」の話聞くことで、児童は、昭和時代になって、武陵の子孫が膨大な文献を整理して、句集を発刊することで、時代に埋もれかけていた西尾武陵の功績が広く地域に方々に知られるようになったことがわかった。そこで、総合的な学習の時間に行っている、地域の歴史や文化を調べ、フォーラムを開催して、その魅力を地域の方々に伝えるという学習の意義を理解し、今後の活動への意欲が高まった。
- ・江戸時代後期に詠まれた西尾武陵の俳句を解説していただくことで、同じ地域の風景を詠んだ、自分の句との完成度の違いに驚き、さらに感性を磨き、西尾武陵に少しでも近づきたいと思うようになった。この授業以後の俳句活動を積極的に行うようになった。



〈西尾武陵の子孫のお話を聞く〉

西尾武陵さんの生き方に学んで

私は今日、Aさんに武陵さんの人生についてのお話をさせていただいて、武陵さんの素晴らしさがわかりました。それは限られた条件のなかでも、あきらめずに精一杯に努力して、全国的に有名な俳人になったところです。それと数え切れないぐらい多くの、大山の自然を詠んだ見事な俳句に圧倒されました。私も同じ大山に育っているのだから、西尾武陵さんに少しでも近づけるように感性をさらにみがいて、俳句を作っていきたいです。 <ワークシートより>

地域の文化を守ることの大切さ

武陵さんの子孫であるAさんが、江戸時代の西尾武陵さんの生家を今も守り、歴史美術館で「西尾武陵展」を開いて、多くの方に武陵さんのことを伝えようとされている姿に感心しました。私もこれから大山の歴史について調べて、フォーラムを開いて多くの方々に大山の文化の素晴らしさを伝えていきたいと思いました。 <道徳ノートより>

3 「いきいき学校応援団」の導入の成果と課題

(1) 取組の成果

- ・実際に西尾武陵の生家を守り、俳諧の貴重な資料を保存されている方の話を聞くことで、身近な地域の文化や歴史に対する関心が高まり、さらに地域のことについて調べようとする意欲が育ってきた。
- ・Aさんに、貴重な文化財の実物を見せてもらったり、自作資料の内容を補ってもらったりすることによって、学習がより深まりのあるものになった。

<応援団からの言葉>

地域の児童たちが、先祖である西尾武陵のことを熱心に学んでくれて感激しました。是非、生家にも来てもらって武陵の息吹を感じてもらいたいです。この授業だけで終わらず、この出会いを大切に、これからも、子どもたちに西尾武陵の魅力を伝えていきたいと思いました。

(2) 今後の課題

- ・今年限りの「いきいき学校応援団」を招いた特別な実践で終わらず、カリキュラムに組み込んで、6年生になったら、この資料で「いきいき学校応援団」を招いて西尾武陵について学ぶという「学びの伝統」となるように教職員で地域教材に関する研修を深めていきたい。
- ・「いきいき学校応援団」を生かす発問や板書、考えが見えるワークシートのなどの工夫についての研修が必要である。

道徳の時間への「いきいき学校応援団」の導入事例

1 「いきいき学校応援団」の導入のねらいと期待できる効果

(1) 導入のねらい

自然の美しさに感動したり、郷土の歴史や先人の努力を知り、ふるさとを誇りに思ったりすることを子どもの頃に味わうことはとても重要だと考える。子どもたちの人となりの根っこになる部分だからである。そのために、道徳の時間が重要であるが、それだけでは不十分である。私たち教師が、どんなに郷土や自然のすばらしさを説いても、直接それらに関わる方々にはかなわない。

そこで「ほたるが飛ぶ森」では、子どもたちがより実感できるよう、ほたる飼育に携わるAさんに応援をお願いした。

(2) 期待できる効果

- ・道徳の時間のねらい達成をより確かなものに行うことができる。
- ・家族や担任など身近な大人だけでなく、地域の人々が子どもたちに期待し、よりよい人になってほしいと願っていることを伝えることができる。
- ・地域の大人たちの願いを受け、子どもたちがゆったりとした安堵感を味わうことができる。

2 「いきいき学校応援団」を導入した道徳の時間

4年生の授業で

(1) 本時のねらい

子どもたちが、自然の美しさに気づき、進んで自然を大切にしようと思えるようにすることをねらいとした。そこで、長年ホタルの飼育に携わり、絶滅寸前だったホタルを地域の川によみがえらせた経験をもつ方に「いきいき学校応援団」として授業に参加していただいた。

(2) 「いきいき学校応援団」を生かす手だて

- ・「応援団」の方は、長年、ホタルの飼育に携わってきており、絶滅寸前だったホタルを、地域の川によみがえらせた経験を持つ。打ち合わせでは授業の中でねらいとする価値について説明し、「応援団」の方の経験談を授業の中でどう生かすかということを中心に話し合った。そして授業の終末での説話として次のようなことを話していただくことにした。
- ・どうしてホタルの飼育を始めようと思ったのか。
- ・ホタルの飼育をしていて、感じたこと（うれしかったこと、悲しかったこと、感動したことなど）は、どんなことか。
- ・自然の偉大さについて。
- ・子どもたちに願うことはどんなことか。

(3) 授業の概要

- 主題名 : 美しい自然を大切に 3-1) 自然愛
- ねらい : 自然の美しさに気づき、進んで自然を大切にしようとする態度を養う。
- 導入する応援団 : ホタルの飼育に携わり、絶滅寸前だった地域の川のホタルをよみがえらせた経験をもつAさん。

○資料及び内容について : ほたるが飛ぶ森

資料「ほたるが飛ぶ森」は、市民の交流広場である「せせらぎの森」にほたるを飛ばしたいと、市役所の人や地域、学校が力を合わせて活動し、ついにほたるを飛ばすことに成功するという話である。主人公の行為を通して美しい自然に対する感動と、自分たちの手で、美しい自然を取り戻した喜びに共感させたい。また、おじいちゃんがほたるを見たときに、たたいていた手をおがむようにすり合わせた時の気持ちを考えさせることにより、ほたるが戻ってきたことに対する感謝の気持ちや、再びほたるが見られるようになった感動にせまらせたい。

○展開例

(●応援団の導入)

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1 ほたるについて知っていること、ほたるを見たときのことを発表する。</p> <p>2 資料「ほたるの飛ぶ森」を読んで考える。</p> <p>○暗くなるのも待たずに森へ向かった正太は、どんな気持ちだったでしょう。</p> <p>○ほたるの光を見ながら、目をうるませた内田さんは、どんな気持ちだったでしょう。</p> <p>○たたいていた手を拝むようにすり合わせたおじいちゃんは、どんなことを思っていたでしょう。</p> <p>○クラス一人一人の顔を浮かべながら、ほたるの光を追う木村先生は、どんなことを考えていたでしょう。</p> <p>○みんなが「来年もほたるをたくさん飛ばそう。」と言ったのはどんな気持ちからでしょう。</p> <p>3 自然が美しいなあと感じたり、美しい自然をいつまでも大切にしておきたいと思ったことはないか振り返る。</p> <p>4 応援団のお話を聞く。</p>	<p>○30年ぐらい前には、ほたるがほとんど見られなかったこと、ほたるが見られるようになった経過を伝える。</p> <p>○早くほたるを見たい、待ちきれない、楽しみだという気持ちを押さえない。</p> <p>○美しく光るほたるを見た感動とせせらぎの森を作った達成感をとらえさせたい。</p> <p>○ほたるの美しさに対する感動と、ほたるが再び飛んだことへの感謝の気持ち、昔のようにほたるの飛ぶ自然がもどってきたことに対する喜びに共感させたい。</p> <p>○クラスのみんなできれいにしたせせらぎにほたるが飛ぶようになったうれしさに気づかせたい。</p> <p>○ほたるが飛ぶ美しい姿に感動し、その美しい自然を持続させたいという気持ちになったことに気づかせたい。また、来年もほたるを飛ばすためには、どんなことをしないとイケないかを考えさせることにより、自然愛護の気持ちへつなげたい。</p> <p>○「いままでは」「わかったわ」「これからは」を書かせることで、自分を振り返らせたい。</p> <p>●「応援団」の話聞くことにより、自然愛護に対する意欲を高めたい。</p>

○授業を振り返って

本授業においては、「いきいき学校応援団」を導入することで、子どもたちの自然に対する意識がより高まったと思われる。

資料を使っでの学習の中で、子どもたちは、登場人物の自然に対する思いや、ホタルの飛ぶ美しい森をよみがえらせた登場人物の喜びと感動に気づくことができた。また、ホタルの飛ぶ自然が、どれほど美しいものであるかということや美しい自然を守ることの大切さには気づくことができたものの、そのことを

自分のこととしてとらえることができていない児童が多かった。

けれども、「応援団」の話聞くことで、自然の大切さを自分のこととしてとらえ、自分の身の回りの自然を大切にしたり、自然と積極的に関わっていかうとしたりする子どもたちの前向きな姿勢を感じ取ることができた。また、「排気ガスや水の汚れなど、人間の手による環境破壊は、ほたるの幼虫を根絶してしまう。しかし、どんな大雨による大洪水でも、幼虫を全て滅ぼすことはない。川底のほんのすき間に少しの幼虫を残すもの。」と、平成16年秋の台風23号による被害の話では、自然の驚異と偉大さを語っていただいた。この話により、多くの児童が、自然に対する畏敬の念をもつことができたと感じた。

<児童の意見より>

ぼくは、2年生のとき、ゆづるは山へ校外学習に行きました。辺りの木はとても美しくてきれいだなと思いました。近くに小川が流れていて、とても水がすき通っていました。いつまでも、美しい自然があるといいなと思いました。

ホタルのお母さんのAさんの話を聞いて、「自然は怖いところもあるけど、最後までほこさない。ほんの少しだけ残してくれる。」と言っていたので、ぼくは自然に感動しました。植物や生き物、命あるものを大切にしていこうと思いました。

2 「いきいき学校応援団」を導入した道徳の時間

(1) 取組の成果

「いきいき学校応援団」の導入は、子ども達だけでなく、私たち教師にもよい刺激となった。事前の打ち合わせや授業の準備など、1時間の授業をより広く、より深く考えなければならないからだ。俯瞰的に授業を考えると見えてくることが多くある。例えば、総合単元的な道徳学習の構図であったり、総合的な学習の時間と道徳の時間のつながりであったり。

また、「応援団」の方々の子ども達への深い愛情と将来を担う子らへの期待を感じることもできた。子ども達は、地域の宝である。そして、この子ども達の人格形成の一端を担う喜びと責任を再確認することができた。

(2) 今後の課題

- ・「応援団」の人たちと、道徳的価値についての打ち合わせを行うことが難しい。
- ・総合単元的道徳学習の単元作りをしていけば、もっと効果があった。例えば、「ほたるが飛ぶ森」では、理科や総合的な学習の時間に、自然や環境について学習するので、多領域にわたっての単元構想が可能であった。
- ・「応援団」を導入する上で、「応援団」の方の専門的な知識を十分に生かすためには、授業構想をしっかりとしておく必要がある。どの場面でどのような形で授業に参加してもらうかということを綿密に計画しておかなければならない。
- ・総合単元的道徳学習の授業の場合などは、一度来てもらうのではなく、複数回来ってもらうことで、さらに充実した学習ができるのではないかと思う。

<応援団からの言葉>

純粋な目で話に聞き入ってくれた子ども達。夜空を舞う幻想的なホタル。そのホタルも人間と同じ生命の営みをしているということ。人よりもっと敏感に自然の影響を受けること。ホタルの話でそのようなことにも気づいてほしいと願っていました。未来を生きる子どもたちが、自然に抱かれて生きていけることを切に願います。



第Ⅲ章

道徳教育フォーラムの実施事例

三木市立緑が丘東小学校 ……………62

篠山市立丹南中学校 ……………65

道徳教育フォーラムの実施事例

1 フォーラムのねらい

本校は、神戸市に隣接する新興住宅地にある。ほぼ全戸が一戸建て住宅であり、地域住民どうしのつながりが特に濃いとは言えない。

ただし、開校28年目を迎え、本校卒業生が在籍児童の親になっている場合も数例見られるようになってきており、また、学校・家庭・地域のつながりの重要性を認識する保護者も多く、今後、地域の学校としてより大切な役割を果たさなければならないと感じている。

本校では、「自他の生命をみつめるあたたかい心を育てる道徳教育の充実」をテーマに道徳教育の研究を進めてきた。そして、研究の方向として、地域を生かした魅力ある指導のあり方について研究してきた。

道徳教育を進める上で、家庭や地域との連携、協力は欠かすことができないという主旨の上に立ち、この「道徳教育を語るフォーラム」を開催することにした。

昨年度の開催は、地域、保護者の代表の方がパネラーとして、それぞれの立場から発言頂き、参加者はその意見をもとに意見交換をするという進め方をしたが、今年度は、フロアーディスカッションを取り入れて、より身近に話し合いができるようにと進化した。

2 フォーラムの概要

(1) テーマ

「今 子どもたちに育てたい心と わたしたちにできること」
— 規範意識の向上 及び 基本的な生活習慣の確立 —

(2) 場 所 三木市立緑が丘東小学校 体育館

(3) 日 程 10:25～ 受 付
10:40～ 音楽ミニ発表
10:50～ パネラー提言
11:20～ フロアーディスカッション

(4) パネラー

親父の会（保護者有志の会）代表	母親代表
地域住民代表	小児科医
民生児童委員	本校職員代表

(5) 参加者

保護者（祖父母含む）
地域の方々（自治会 老人会 民生委員児童委員）
教育関係者（小中特別支援学校 県市教育委員会）
本校職員

3 フォーラムの実際から

(1) パネラー発言要旨

提言1 母親代表

ダウン症の長男が生まれて、その現実をなかなか受け入れることができず、閉じこもった気持ちで過ごしていた。そんな時、下校してくる娘の歌声が聞こえてきた。♪「野に咲く花のように～ときには暗い人生もトンネル抜ければ夏の海～雨のちくもりでまた晴れる」人目もはばからず大声で歌っていた。私は、その歌声にとっても励まされた。

特別な才能がなくても、勝ち組になれそうでなくても、大切な一人の人間として受け入れ認めてやってほしい。家族に、ありのままの自分を受け入れられてこそ、子どもも、自分自身を肯定し受け入れられるのではないか。

提言2 親父の会代表

（漫画「ドラえもん」のオリジナルには無い最終回を例に挙げて）子どもは、ある目標を持つと、また大切なものを守るためには、すごい力を発揮する。親として、子どもにチャンスがたくさん与えてやりたい。

子どもと接する時間が少ない父親だが、接する時は、子どもといっしょにそれ以上に、父親本人が楽しむといいのではないか。時には、父親の存在感を見せるのもいい。

提言3 地域住民代表

地域の人や様々な人から、声をかけてもらおうと、愛されて育っているという実感がわいて、何よりも励みになる。子育ては命をつなぐ仕事をしていると思う。親のしたことを子どもは覚えていて、そして、次の世代につなぐと思う。

子育ては豊かな人間関係の上でできる。わたしは、地域がそんな豊かなところになるようにしていきたい。

提言4 民生児童委員

最近、結論を既に持っている、法律に照らしての有利性をどう確保するかといった損得上の悩みを法律相談に求める傾向がある。法律は人間社会のぎりぎりの最低のモラルであって、人道的、倫理的な視点をもっと大事にすべきである。

他者を思いやる心を育むには、自分への強い自制と相手への深い思いやりや想像力が必要である。心のありようが変われば、全てが変わる。先入観にとらわれず、心をニュートラルにすればポジティブになれるし意欲もわく。

提言5 本校職員代表

子ども達が友だちと一緒に自分の力を精一杯出している姿や努力している過程をずっと見られる立場にいることを幸せに思う。どの子も家庭では見せないであろう我慢強さと真剣さで他人の中で緊張しながら頑張っている。

子ども達には、友だちの中で助け合って幸せに生きていく力をつけてほしい。そのためにキーになるのは、「ごめんね」と言える素直さと「いいよ。」と言える許容性、そして、「ありがとう。」と言える感謝の気持ちである。



(2) フロアーディスカッション 会場からの発言要旨 (意見交換)

- ・いい子でばかりいるのは疲れるだろう。地を出して居られる家庭にしたい。
- ・親の口癖は子どもに影響を与える。
- ・兄弟がいるが、お兄ちゃんに頼ってしまい「ありがとう。」という言葉が忘れがちになる。
- ・親が子どもに対して「ありがとう」は言えるが、「ごめんね」は言いにくいと気がついた。
- ・子どもが「格好良いな。すごいな。」と尊敬しあこがれる大人の姿を見せる努力をすることが大切ではないか
- ・子どもは親の何気ない一言を聞いているし、行動を見ている。
- ・子どもは「えこひいき」に敏感である。ほめ方、叱り方も気をつけなければならない。
- ・夫婦で子どもに対するルールを確認し合い、共通のスタンスでかかわることになっている。



4 フォーラムを終えて

(1) 成果

- ・道徳教育に対する保護者の関心が高まった。
- ・道徳教育は、家庭・地域の教育が大切であるという認識が深まった。
- ・県、市、学校のめざしている教育（道徳教育）を周知する機会になった。
- ・パネラーが地域の人であったり、保護者であったりしたことから、参加者が身近な課題として捉えることができた。
- ・学校、地域での子どもたちの実態を知る機会になった。
- ・課題の解決について、価値や手法の押し付けにならず、自ら考え個々に応じた方法で解決するような話し合いになった。
- ・参観日と兼ねて開催したことで多くの参加者を得られ、加えて、学年グループごとの小集団に分けて話し合ったことで、話し合いをより深めることができた。

(2) 課題

- ・学校と保護者のより密接な連携を図るフォーラムにしていく必要がある。
- ・保護者のニーズに応じたテーマを設定することは難しいが、例えば、「規範意識」をより焦点化して「早起き」などの具体的なテーマにしていくことが有効ではないかと思われる。
- ・パネラーの発言時間と相互の意見交流の時間を確保する点でのいっそうの工夫が求められる。
- ・より多くの参加者を得るために、開催日時や内容、進め方等の工夫が求められる。

道徳教育フォーラムの実施事例

1 フォーラムのねらい

数年前より、本校において数名の生徒による指導への反抗、暴言・暴力などの問題行動が頻発した。そのため、多くの生徒が不安を覚え、正常な学校生活が過ごせない状況があった。現在、それらの生徒は卒業し、学校は平穏を取り戻したかのように見えるが、強い者が弱い者を押さえつけるような上下関係や、清掃や給食当番など普段の学校生活の中で、自分でどうしてよいかわからずに「指示待ち」の生徒が多いように感じられた。このような学校の体質の改善を図り、問題行動は集団として「許さない」という姿勢を築き、自分で考え行動できる力を育てたい。そして、日々の学校生活を大切に、「当たり前」の事を当たり前にする」ことにより、本校の課題を解決していきたいと考えた。そのためには、学校だけでなく、地域・家庭と連携しながら取り組み、同じ方向性を持って生徒の成長に向けて取り組んでいただくためにも、「正しい善悪判断に基づく道徳的実践力の育成 ～生徒の自主自立をめざして～」のテーマで、教育フォーラムを行うことにした。

道徳教育の取組としては、まず道徳の授業の充実を図るようにした。授業において 知的理解を進め、その上にたった道徳的実践力の育成を図るために、「正しい善悪判断」「規範意識」「自立心」などを主題に設定し、使用する資料を通して生徒自身の価値葛藤を大切にする授業を展開することを意識した。そして授業の中で自らの考えを深め、それを生かす場としての生徒会活動を大切にしたい。生徒会活動の時間を確保すること、日々の地道な活動を確実にさせること、教師は適切な支援を心がけ、生徒に「自分たちの手で創り上げ行動する生徒会」という意識を持たせるようにした。

教育フォーラムでは、生徒や教師からは学校で取り組んでいることを、地域・家庭からは子どもたちの状況から感じられることを発表していただき、よりよい生徒の成長を目指して、互いに考える良い機会となればという思いで開催することになった。

2 フォーラムの概要

(1) テーマ

正しい善悪判断に基づく道徳的実践力の育成
～ 生徒の自主自立をめざして～

(2) 場所

篠山市立丹南中学校

(3) 日程

13:35～ 道徳の全クラス公開授業
14:50～ 研究概要発表
教育フォーラム パネラーの発表と討議

(4) パネラー

・生徒代表 ・「いきいき学校応援団」 ・PTA代表
・教職員

(5) 参会者

保護者（祖父母含む）
地域の方々（自治会 老人会 民生委員児童委員）
小中特別支援学校教職員

3 フォーラムの 実際から

(1) 各パネラーから普段の生活の中からのいい話（自分でやる気を出して取り組んだ経験、やる気を引き出すような取組等）の発表

- ・生徒会のリーダー研修会で、リーダーたる者はいい雰囲気を自ら作り出すことが大事であることを知り、以後それを実践している。
- ・ボランティア活動に参加して、表の舞台を成功させるためには沢山の裏方に支えられていることを知り、自分も頑張ろうと思えた
- ・委員長に当選して自覚が高まり、生徒会活動を活性化させるために率先して活動している。(生徒の発言から)

- ・あいさつの大切さを子どもに出会うたびに伝えてきた。それが実践されているのを見ると嬉しくなる。(「いきいき学校応援団」の発言から)

- ・子どもを怒るのではなく、些細なことでもほめると良い状態が続く。
- ・目の前に達成したら楽しいことが待っているような目標があれば、それに向かって努力できる。(保護者の発言から)

(2) パネラー個々の発表を受けて、自分の体験や思うことの紹介・討議

- ・自分がしんどかったとき、母が励ましてくれたことが嬉しかった。
- ・委員長として、みんなに注意ばかりしてまわりが理解してくれないことが多かったとき、同じ執行部の仲間がいてくれる頼もしさを感じて、頑張ろうという気持ちになれた。(生徒の発言から)



- ・地域の中で、生徒がよいことをしてくれたことをわざわざ地域の方が学校に来て報告してくれた。地域の中でほめていただいたことが、生徒の善意を育てることになると思った。(教員の発言から)

- ・子どもの安定は、心や言葉の環境も含めて家庭の安定が大切である。家庭で、規則正しい生活をはじめとする基本的な生活習慣をきちんとしておくべきだ。地域から子どもを見ていて、親は仕事で忙しいとは思いますが、食事をきちんととらせるなど、普段の生活をもっと大切にして子育てをするべきではないかと感じる。(「いきいき学校応援団」の発言から)

- ・子どもは親の背中を見て育つし、我慢する心、耐える力を身につけるのは家庭の仕事である。(保護者の発言から)

(3) まとめとして

- ・道徳性を高める最大の環境は大人である。家庭では、親がどういった姿勢で子どもに接するか、地域や学校では良いタイミングで子どもをほめたり、認めたりすることが大切である。また、大人自身が子どもの道徳性や自発性を引き出すために、子どもにどう接しているかを振り返ることも大切である。

4 フォーラムの を終えて

- ・今回のキーワード「当たり前が当たり前でできる」ことについて、その当たり前のことに気づいて認めていくことをしないと、子どもはそのことが素晴らしいことだと気づきはない。どれだけ価値あることを知らせていく必要がある。今、学校で生徒たちが「当たり前でできるようになってきた」最大の原因は、大人の意識改革だと思う。学校通信などから、学校の向いている方向を地域・家庭と共有できるようになってきた。実際に学校へは悪い話しか入ってこないことが多い中、いい話を伝えてくださる例も聞かれたことより、学校と家庭・地域の良いキャッチボールの中で生徒の道徳性を育てていきたい。

(1) 成果

- ・試行錯誤しながら行ったフォーラムであったが、校内推進委員会や事前の打ち合わせ等で共通理解をし、ねらいに沿った方向で話が進み、参加者個々に何か得るものがあったフォーラムになったと思う。
- ・生徒の発言などから学校での生活ぶりが、地域・保護者の方によくわかっていただけたのではないかと感じる。
- ・保護者や地域の方からの提言により、子どものしつけの在り方等について考えることができた。
- ・家庭・地域・学校の三者がともに子どもをよりよく育てていこうという目標を持ち、それぞれの役割を果たしていこうという気運が高まった。また、互いのよりよい連携により、さらに効果を上げることも確認できた。
- ・子どもの自主性を育むには、大人が子どもの価値ある行動を認め、評価することが大切であり、それにより、子どもの次の意欲につながるということがわかったので、意識をして子どもの行動を見るようになった。



(2) 課題

- ・より効果的なフォーラムにするには、パネラーの人選と人数が大切である。
- ・もっと多くの地域の方・保護者に来ていただくには、時間や日時の設定に考慮が必要である。

<フォーラムを終えて保護者や地域の方の感想>

- ・生徒が茶道指導をお世話になっている地域の方からの話が印象に残った。普段の家庭での子どもへの接し方はしっかりしているつもりだったが、まだ、足りないところがあることを指摘していただいたような気がした。
- ・我が子も含めて、生徒の話聞くことはあまりないので、いろいろなことを思いながら生活していることがわかった。ただ、時間が短くて、もう少し話を聞きたいと思うところがあった。
- ・地域として、学校が取り組んでおられることを知り、地域でもできることがもっとあるのではないかと感じた。

平成19年度「道德教育推進協議会」委員

区 分	氏 名	職 名	所 属 等
学識経験者	渡 邊 満	教 授	兵庫教育大学大学院
	桂 正 孝	教 授	宝塚造形芸術大学
地域住民等	前 田 保 雄	参 与	三田市PTA連合会(前 兵庫県PTA協議会副会長)
教 育 機 関	澤 田 薫	主任指導主事	県立教育研修所
	中 阪 守	指導主事	神戸市教育委員会
	桜 井 輝 之	副 所 長	兵庫教育文化研究所
校 園 長 会	春 豊 子	園 長	神戸市立御影幼稚園
	山 口 登	校 長	神戸市立長尾小学校
	行 本 美 千 子	校 長	神戸市立高倉中学校
学 校 関 係 者	圓 尾 義 人	教 諭	神戸市立垂水東中学校
	玉 田 成 子	主幹教諭	尼崎市立大庄小学校
	平 田 美 紗 子	教 諭	宝塚市立中山五月台中学校
	永 田 秀 明	教 諭	明石市立大久保北中学校
	大 橋 尚 人	教 諭	三木市立緑が丘東小学校
	藤 岡 章 子	教 諭	福崎町立田原小学校
	林 睦	教 諭	太子町立太子西中学校
	西 村 徹	教 諭	豊岡市立府中小学校
	酒 井 達 哉	教 諭	篠山市立大山小学校
	仲 野 敬 子	教 諭	南あわじ市立榎列小学校
	今 西 敏 美	教 諭	三田市立あかしあ台小学校
	岸 道 春	主幹教諭	稲美町立天満南小学校
萩 原 一 美	教 諭	相生市立青葉台小学校	